ふじみの

最終号

東京農大畜友会

畜友会の皆さんへ

畜産学科長・畜友会会長　桑　山　岳　人

「ふじみの」最終号の原稿依頼をもらい、いろいろな思いが交錯しています。何かの巡り合わせか畜産学科としての最期の五年間の畜産学科長を務め、結果的に最期の畜友会長も合わせて務める事になりました。「ふじみの」最終号は通算では五十七号ですが、畜友会の創設は一九六〇年で、キャンパスとしては千葉県茂原市、東京都世田谷区、そしてこの神奈川県厚木市と三つのキャンパスで長きに亘り活動して来ました。その間、畜友会はまさに会員相互の親睦を図ると共に畜産学科の発展に貢献してきました。

教員としての畜友会活動への参加として印象深いのは、学生の皆さんと同じで収穫祭への参加です。特に体育祭では、昔は教員の参加競技の得点も学科の得点に加算されていたので、二人三脚では、ルール違反すれすれの秘策を編み出し、一位になった事や1／10マラソンでは教員の中では二位になった事などが思い出されます（助手時代はスリムでした）。また、学生が夜遅くまで収穫祭の準備をしているので、差入としてマックのハンバーガーとチーズバーガーを合わせて百個差し入れした事もありました。その後差入れは途絶えていましたが、ここ数年その精神を復活させ、現在の寸胴鍋でのオリジナルトマトカレーや牛スジ入特製ビーフシチューの差し入れに繋がっています。学科長も今年度限りなので、それももう終わりかなと家内に話したら、学科長を止めたら止めるのですかと怒られましたので、更にメニューを増やして退職するまでは（？）差し入れを続けたいと思います。

これから皆さんは、東京農業大学を卒業して、社会へ羽ばたきますが、東京農業大学農学部畜産学科の一員であった事を誇りとして頑張って下さい。これからも畜産学科の精神は、動物科学科と言う一学科に留まる事なく農学部の中で必ず引継がれて行くものと確信しています。

＊畜友会で保管されていた『ふじみの』は農学部図書館において製本して配架する事になっています。厚木キャンパスにお越しの際は、『ふじみの』保存版を閲覧して、自分たちが在学した期間だけでなく畜友会の歴史を是非紐解いてみて下さい。

令和三年三月三日

ふじみの発刊にあたり

畜友会委員長　中牟田　泰　央

花々の蕾もようやくほころび始め、うたたねの心地よさを感じる今日この頃、今年も「ふじみの」を発刊することとなりました。

五十七刊である本刊を持ちましてふじみのは最終刊となります。そんな最終刊には畜産学科・動物科学科の先生方からの寄稿や七十代目畜産学科統一本部一人一人の想いを掲載しています。

是非、隅々までご覧頂けたら幸いです。

ふじみの

目次

畜友会の皆さんへ　畜産学科長・畜友会会長　桑山　岳人　1

ふじみの発刊にあたり　畜友会委員長　中牟田泰央　3

同窓会だより

「ふじみの」最終号に寄せて　畜産学科同窓会会長　栗原　良雄　6

畜産振興会

「ふじみの」最終号に寄せて　家畜生理学研究室　半澤　惠　8

研究室だより

動物生殖学研究室　10
家畜育種学研究室　13
家畜生理学研究室　15
家畜飼養学研究室　17
畜産物利用学研究室　19
家畜衛生学研究室　21

ふじみの寄稿原稿（教員）

寄稿原稿
農大の職員として　久保田文恵　23
畜産物利用学研究室…これまでこれから　酒井　孝徳　24
ふじみの最終号を向かえて　多田耕太郎　25
畜産学科から動物科学科へ　白砂　孔明　26
「印半纏」　平野　貴　28
私の宝物　野口　龍生　29
野村　こう　31

集う学友

楽しかった農大　4年　荒川　拓巳　33

畜友会だより

令和元年度畜友会事業報告　34
令和元年度畜友会決算報告　35
令和元年度畜友会役員　36

七十代目畜産学科統一本部　各部門より

好きにやる　統一本部委員長　中牟田泰央　37
わいさおいさ　神輿部門委員長　池田　聖　39

個性　神輿部門　池田　麗名　39
畜友会で得た宝物　神輿部門　髙橋慎太郎　40
感謝　体育祭部門委員長　大畑　夏帆　41
ふじみの　家畜苑部門委員長　木原　龍成　42
収穫祭　家畜苑部門　木下　雅人　43
キマッた。　家畜苑部門　下鳥　誠行　44
第20回収穫祭について　家畜苑部門　樋山　颯　45
畜産学科統一本部について　特別企画部門委員長　松宮　桃香　46
愛羅武勇　特別企画部門　橋本　諭　47
七〇代目の仲間たち　櫓部門委員長　半谷安紗美　49
感想　櫓部門　太田　碧　50
活動　装飾部門委員長　木瀬康太郎　51
「犬猿」　装飾部門　宇都宮遥斗　52
宣伝隊　宣伝隊部門委員長　松澤　琉貴　53
第20回収穫祭　宣伝隊本部副隊長　筑紫　大貴　54
三学科最後の収穫祭　宣伝隊部門　根本　茂塁　55

編集後記

編集委員長　4年　大畑　夏帆　57

同窓会だより

「ふじみの」最終号に寄せて

東京農業大学農学部畜産学科同窓会
会長　栗　原　良　雄

「ふじみの」第五十六号の発行おめでとうございますと原稿を書いたばかりなのに、「ふじみの」最終号の原稿の依頼を受け、いろいろな思いが湧いてきて何を書いていいかしばらく思い悩んでしまいました。

畜産学科の名称変更に伴い「畜友会」もその歴史を閉じることになりました。一九六〇年に「畜友会」が設立され、翌年に機関紙「ふじみの」一号が発行されました。それから五十六号を迎えたことになります。その間、確か学生運動が盛んな時、発行が出来なかった時期があったような記憶があります。それ以外は途絶えることなく発行されてきたことは歴代の役員の努力の賜物ではないかと思います。感謝の気持ちでいっぱいです。誠にありがとうございました。

私も学生時代に畜友会の役員の一人として「収穫祭」の仮装行列に参加、役員仲間と夏に佐渡の友達のところに海水浴に行ったり、何号か覚えていませんが「ふじみの」編集に関わった記憶を思い出しました。

私たちが学んだ畜産学科は、当時、国の食料増産の方針もと各県に農業高校、国立・私立大学に農学部が設置され、我が農業大学も一九四七年（昭和二十二年）千葉県茂原市にあった千葉農学部に専門部畜産科として増設されて七十三年、一九四九年（昭和二十四年）新制大学農学部畜産学科として創設され七一年の歴史があります。その間、一九六一年（昭和三五年）に世田谷キャンパスに移転、さらに二〇〇〇年（平成一二年）に厚木キャンパスに農学科と共に移転して現在に至っています。

この間、多くの先生方の指導のもと数多くの人材を輩出してきました。

現在は畜産学科の名称を残しているのはわが農大だけになってしまいましたが、過去にも学科名称変更を議論した歴史があります。それは今から二十六年以上前になります。大学設置基準の大綱化で授業科目（一般教育科目、専門教育科目）の設定が各大学で自由（一般教育科目が廃止）にできるようになり、畜産学科も検討を重ねた結果、カリキュラムの改正を行い、一九九四年（平成六年）四月から新カリキュラムがスタートしました。この間、一部の大学を除いて大学名および学科名から「畜産」の名称が無くなりました。さらに、生産の教育現場である農場の規模も縮小され、カリキュラムも設立当時の教育内容がかなり変遷しています。

この時、畜産学科も学科名をこのまま継続するか確か「動物科学科」に変更するかかなりの時間をかけて議論するとともにそれに伴うカリキュラム見直しの検討を行い、一部の科目名を「動物…」と変更して学科名は従来の「畜産学科」名で当時の文部省に申請することになりました。その結果、「畜産学科」のままでよいとの回答があり、「畜産学科」の名称が継続されることになりました。

農学部は、農業は農学、林業は林学、家畜生産業は畜産学。造園業は造園学等々と食料等の安定的な生産・加工・流通を目的にした教育・研究が中心でした。近年になり、その教育・研究分野が生産・流通・加工からその周辺に広がり、これまでの名称のもとでは収まりがつかなくなってきていることは確かです。それが名称変更に繋がっていったのではないかと思います。これは時代の流れなので仕方がないことなのでしょうが、名称だけでは何を教えているのかわからなくなってきている感じがします。

最後に、新たにスタートした「動物科学科」が更なる発展とこれまで築いてきた「畜産学科」の伝統を引き継いでいってほしいことを願って筆を擱きます。

以　上

令和二年二月

畜産振興会

「ふじみの」最終号に寄せて

家畜生理学研究室
半澤　恵

さて、小職の手元には「ふじみの」が1986年発刊の25号から揃っています。当時は副手という職階があり、その2年目に当たります。「ふじみの」は、1949年に千葉県茂原キャンパスに誕生した畜産学科の新入生が1959年から世田谷キャンパスに入学することになった翌年1960年の「畜友会」発足に伴い、1961年に創刊号が発刊されました。本誌の名称は、茂原キャンパスのあった「富士見のの地」に由来するということが26号に書かれていました。本誌の表紙に富士農場やそこで飼育される家畜が表紙を飾ることが多いのも、縁でしょうか。縁といえば、32号には初めて小職が執筆した文章を掲載して頂きました。最近の「ふじみの」では余り目にしませんが、当時の先生方の寄稿文には研究やその哲学に関するものも多く、小職の記事も「馬の運動と赤血球」に関するものでした。一体何人が読んでくれたことやら。その後、1988年に厚木キャンパスが開設され、畜産学科は農学科と共にこの地に新入生を迎え入れました。当時、思うところがあって、一教員の立場で36号からはちょくちょく駄文を載せて頂きました。しかし45号（2009年）以降は、毎号、東京農業大学畜産振興会の代表、あるいは学科長としての立場で、皆さんの卒業論文とは違って？前年度の文章を多いに参考にして毎年紙面を汚してきました。それにしても久々に、一教員の立場で執筆するのが、よもや最終号になるとは！波瀾万丈な畜産学科、畜友会と共に、後半の半分余りを共に過ごせたことを、誇りに思い、感謝します。

さて、思いもよらないことと云えば、今日は2020年3月9日、あと2日で東北大震災から9年になります。9年前は余震の危険から卒業式と入学式の式典が見送られました。今年は、新型コロナの流行とまったく理由は異なりますが、式典は行われないことになりました。実際に被害に遭われた方々には、暢気なことを云うなと叱られても仕方ありませんが、10年足らずの間に2度も重要な式典が実施されないことになるとは、驚きを隠せません。しかし、今なら普段はピントこない「人生何が起こるか分からない。今を大切に生きよう。」という説教じみた言葉も多少は現実味があると思います。

卒業生諸君にとっては、最後の畜産学科卒業生になることは、それ以上に思いもよらないことかも知れませんが、誇りを持って現実を受けとめ、変化を恐れず、人生を切り開いていって下さい。諸君の活躍を心より祈念致します。

研究室だより

動物生殖学研究室

動物生殖学研究室は桑山岳人教授、岩田尚孝教授、白砂孔明教授のご指導のもと、大学院生二十名、四年生三十二人、三年生二十五人で構成され、生徒同士で協力し合いながら日々の研究に取り組んでいます。

当研究室では動物の生殖や発生のメカニズムの解明に取り組んでいます。具体的には、生殖細胞、胚、それに由来する動物の産子の正常性におよぼすストレス、加齢そして疾病の影響について、遺伝子やタンパクの発現、内分泌そして動物の行動などを対象に研究しています。また発生工学および生殖補助技術を応用して、絶滅危惧種などを含む動物の遺伝資源の保存や増殖に役立てる技術の開発をめざしています。

三年生は生殖学の基礎的な知識、実験方法等を身に付けると共に大学院生や四年生の研究活動を補助しながら興味のある研究分野について理解を深め、研究テーマを決定し日々先輩たちの指導の下研究を行っております。

今年度は活動自体が難しい状況でしたが、平常時では国内や海外で行われる学会に学生が積極的に参加し、その成果を論文として関連学会に発表しています。毎日遅くまで研究に励んでいてとても研究熱心な研究室です。

平常時の研究室の主な年間行事は、新入室員歓迎会（四月）、論文発表会（年数回）、収穫祭の文化学術展での研究発表、スポーツ大会（年二回）、サッカー大会（年数回）、研修旅行、忘年会、卒業生送別会等があります。

動物生殖学研究室は日々の研究、勉強と楽しい行事を両立しながら充実した研究室生活を送っています。

氏名	卒業論文題目	指導教員
相原　梨穂	ウシ卵管上皮細胞の月齢依存的変化	白砂　桑山
井出　稔	動物園の年間利用者数とSNS利用状況に関する調査研究す	白砂　桑山
乾　希生	オランダと日本の酪農事情の比較検討	白砂　桑山
井上　梨沙	Equol添加による初期胞状卵胞の発育への影響	岩田　桑山
岩田　隼	雌ニホンウズラの飼育面積が血漿トリヨードサイロニンおよび産卵率に及ぼす影響	桑山　白砂
大石　航暉	ヒトとカピバラのふれあいによるストレス関係	白砂　桑山
太田　碧	妊娠期のナノシリカ投与が胎仔に与える影響	白砂　桑山
小澤　廉	Angiotensin IIによる妊娠高血圧腎症様病態が産仔の成長と高脂肪食負荷に与える影響	白砂　桑山
小内　蒼惟	低分子化合物を利用した死亡動物由来細胞培養の効率化の検討	白砂　桑山
加藤　大雅	ウシ子宮内膜におけるIVF胚、PA胚への応答性の変化	白砂　桑山
岸田　紘夢	ホロホロチョウの生産性向上に関する基礎研究	桑山　白砂
木瀬康太郎	リピートブリーダー牛の子宮液添加によるウシ子宮内膜上皮細胞の遺伝子発現網羅的解析	白砂　桑山
小板橋美穂	FSH・hCGによるNLRP3インフラマソーム活性化の阻害効果について	白砂　桑山
小羽いづみ	カピバラの特異的な免疫細胞機能の探索	白砂　桑山
篠田里衣那	高濃度エタノール摂取による肝臓障害とメロングリソディンによる保護効果の検討	桑山　白砂
佐藤　由維	β-ヒドロキシ酪酸添加がウシの顆粒層細胞と初期胞状卵胞の体外発育に及ぼす影響	岩田　桑山
芝原　一茂	飼料添加物がウシの繁殖性に与える影響に関する調査	白砂　岩田

下鳥　誠行　鹿児島県S農場における鹿児島黒豚の産子数、哺乳開始頭数の改善方法の検討　桑山　白砂

関　駿希　ploidy がブタ胚中のミトコンドリア動態に及ぼす影響について　岩田　桑山

鳥塚　友希　ヒト胎盤組織におけるノビレチンの効果の検討　白砂　桑山

中村　沙織　カッパカラギーナン、ローカストビーンガムで作成した基質がブタ体外発育卵子の質に及ぼす影響　岩田　桑山

中村　優介　カピバラの血中プロジェステロン濃度測定による発情周期の測定方法の再検討　白砂　桑山

橋本　渚　レスベラトロール添加が胚発生に及ぼす影響　岩田　桑山

原　駿介　牛胚発育において増粘多糖類基質上での培養が及ぼす影響　岩田　桑山

日方　希保　同一固体のコアリクイ(*Tamandua tetradactyla*)における複数回妊娠中の血漿中ステロイドホルモンの測定　白砂　桑山

舟林　果穂　高脂肪食負荷が妊娠時の母体に及ぼす影響　白砂　桑山

逸見　優花　妊娠高血圧病態におけるNLRP3インフラマソームの重要性　白砂　桑山

宮澤　広大　富士農場肉牛における、体重指標等からのDOHaD仮説の検討　白砂　桑山

本室　綾女　初期胞状卵胞における β-ヒドロキシ酪酸の影響について　岩田　桑山

山口　仁希　酢酸添加がウシ初期胞状卵胞由来卵子の対外発育に及ぼす影響　岩田　桑山

吉川　理沙　動物園におけるハズバンダリートレーニングの実施調査並びに普及の検討　白砂　桑山

家畜育種学研究室

家畜育種学研究室では、家畜改良の基礎となる遺伝学、育種学、分子生物学的見地から広範囲にわたる研究活動が実施されています。

当研究室では、野村こう教授をはじめ、米澤隆弘准教授、髙橋幸水助教の指導の下、大学院生一名、四年生三十二名、三年生二十五名（動物遺伝学研究室）によって構成され、室員各自の自覚と相互の協力によりそれぞれの目標に向かって日々研究が続けられています。主な研究テーマとしては家畜（ウシ・スイギュウ・ニワトリ・ブタ・ヤギ・イノシシ・ミツバチ）を供試動物として、マイクロサテライトマーカーやミトコンドリアDNAなどの遺伝情報から連鎖地図作製や系統遺伝学的研究、統計遺伝学に関する研究などが行われています。

コロナ禍での研究室活動はかなり制限されたものになりましたが、研究室では一年を通して、定期総会（オンライン開催）、収穫祭への参加（バーチャルポスター作成）、卒業論文発表会などが行われ、室員は実験動物の管理、毎週行われているゼミ、定例室員会（オンライン開催）、それぞれのテーマに即した研究などを日々行っています。

氏名	卒業論文題目	指導教員
淺石日菜子	ニホンミツバチにおける遺伝的多様性の研究	野村
阿部　褒子	スイギュウ血清アルブミン遺伝子の多型解析	野村
荒川　拓巳	ウシの肉質関連遺伝子多型に関する研究	野村
井関　七海	ミトコンドリアDNAに基づく鶏の家禽化と世界伝播プロセスの解明	米澤
伊藤　宙	鶏の分子進化速度の推定：形態およびゲノムデータの統合分析に基づく鳥類の分岐年代推定からのアプローチ	米澤
岡田　李恋	ミトコンドリアDNAに基づく鶏の家禽化と世界伝播プロセスの解明	米澤
小野樹里亜	Y染色体遺伝子とmtDNA多型情報に基づくニホンイノシシの系統遺伝学的研究	髙橋
加藤　歩美	Y染色体遺伝子とmtDNA多型情報に基づくニホンイノシシの系統遺伝学的研究	髙橋

神谷　紗那　スイギュウ血清アルブミン遺伝子の多型解析　野　村

川井　陸　鶏の分子進化速度の推定：形態およびゲノムデータの統合分析に基づく鳥類の分岐年代推定からのアプローチ　米　澤

菊池　美歌　マイクロサテライトＤＮＡ多型情報に基づく二ホンイノシシの系統遺伝学的研究　野　村

木船　宗一　ウシの肉質関連遺伝子多型に関する研究　野　村

日下部英介　二ホンイノシシ集団における遺伝的多様性とブタ遺伝子の流入に関する研究　髙　橋

小林さくら　マイクロサテライトＤＮＡ多型情報に基づく二ホンイノシシの系統遺伝学的研究　野　村

斉藤　舞　赤色野鶏および家禽鶏のミトコンドリアゲノムにおける家畜化段階での負の淘汰圧の変動　米　澤

齋藤　里帆　赤色野鶏および家禽鶏のミトコンドリアゲノムにおける家畜化段階での負の淘汰圧の変動　米　澤

佐藤　静華　スイギュウ血清アルブミン遺伝子の多型解析　野　村

柴田　恵実　ニホンミツバチにおける遺伝的多様性の研究　野　村

鈴木　暁斗　二ホンイノシシ集団における遺伝的多様性とブタ遺伝子の流入に関する研究　髙　橋

鈴木　里奈　ミトコンドリアＤＮＡに基づく鶏の家禽化と世界伝播プロセスの解明　米　澤

田中　香苗　マイクロサテライトＤＮＡ多型情報に基づくヤギの系統遺伝学的研究　髙　橋

知野　瑞季　二ホンイノシシ集団における遺伝的多様性とブタ遺伝子の流入に関する研究　髙　橋

外崎　楓　二ホンイノシシ集団における遺伝的多様性とブタ遺伝子の流入に関する研究　髙　橋

内藤　鞠香　マイクロサテライトＤＮＡ多型情報に基づくスイギュウの系統遺伝学的研究　髙　橋

中川　圭輝　家禽化過程におけるＭＨＣ遺伝子の免疫学的進化　米　澤

西ヶ谷有馬　Ｙ染色体遺伝子とｍｔＤＮＡ多型情報に基づく二ホンイノシシの系統遺伝学的研究　髙　橋

西村　海玖　マイクロサテライトＤＮＡ多型情報に基づく二ホンイノシシの系統遺伝学的研究　野　村

向井　綾花　赤色野鶏および家禽鶏のミトコンドリアゲノムにおける家畜化段階での負の淘汰圧の変動　米　澤

村田　菜緒　スイギュウ血清アルブミン遺伝子の多型解析　野　村

矢原　大雅　鶏の分子進化速度の推定：形態およびゲノムデータの統合分析に基づく鳥類の分岐年代推定からのアプローチ　米　澤

山口　昂祐　二ホンイノシシ集団における遺伝的多様性とブタ遺伝子の流入に関する研究　髙　橋

山本　悠亮　ウシの肉質関連遺伝子多型に関する研究　野　村

家畜生理学研究室

家畜生理学研究室は半澤惠教授をはじめ、平野貴教授、原ひろみ助教のご指導のもと、大学院生三名、学部四年次生三十二名、三年次生二十七名で構成されています。

本研究室では家畜・家禽に発現する生理的な特徴やその生理機構の遺伝的支配に関する研究をしています。今年の研究対象動物は、ウシ、ブタ、ウマ、ヒツジ、ホロホロチョウ、ニホンウズラです。

学年毎の活動として、三年次は生理学に関する基礎的な知識、技術を身につけるために講義、ゼミ、実験実習を行い、日常的な実験動物（ヤギ、ウサギ、ニホンウズラ）の管理、院生、学部四年生の卒業論文の補助とともに、各実験の知識を得るために夏休み前から課題別実験を行います。四年次生はこれまで得た知識、技術を持って各々が興味を持った研究を引き継ぎ、あるいは新規のテーマを先生との議論により決定し、卒業論文に取り組んでいます。院生は各々の学位論文のテーマで日夜研究に取り組んでいます。令和二年度は多くが実施できませんでしたが、例年行っている年間の主な行事は、新入室員歓迎会、卒業生との交流会、収穫祭参加、研修旅行、課題別実験成果発表会、卒業論文発表会、卒業生歓送会、年二回の納会、年一回の畜舎大掃除、週一回のゼミナールがあります。

氏名	卒業論文題目	指導教員
赤羽　佑美	プリオン遺伝子の塩基配列多様性とスクレイピー感受性対立遺伝子の頻度の変動	半澤
有田　和央	メキシカンヘアレスピッグの皮膚色に関する遺伝子領域の探索	平野
井郷　一朗	特定農家における黒毛和種枝肉関連遺伝子の効果検証 2	平野
池野　美月	ニホンウズラ hsp47 遺伝子の塩基多型	原
池原　正智	ニホンウズラ TLR15 の塩基多型	原
市村　柾至	プリオン遺伝子の塩基配列多様性とスクレイピー感受性対立遺伝子の頻度の変動	半澤
伊藤　拓紀	ニホンウズラ TLR3 遺伝子多型	原
伊東　茉奈	黒毛和種子牛死亡関連領域に位置する CCDC81 の変異探索	平野
岡嶋　拓人	競技馬の赤血球性状の年間変動	半澤
河野　雄太	黒毛和種における RBP1 遺伝子多型の探索	平野
松本　凌弥	食用馬における RBP4 遺伝子の塩基配列解析	平野
松吉　美紀	メキシカンヘアレスピッグの被毛数に関する遺伝子領域の探索	平野
村上かがり	免疫学的去勢豚と外科的去勢豚間のストレスマーカーの比較	半澤
吉川　航希	日本と欧米のペットシッターおよびペットホテルの比較	原
吉田　万莉	黒毛和種における低受胎責任遺伝子 FOXP3 の多型解析	平野
和田　莉奈	同条件で肥育した同一種雄牛産子の母方ハプロタイプと枝肉形質の関連	平野
小林　彩音	競技馬の赤血球性状の年間変動	半澤
小間　佑亮	ニホンウズラ TLR21 遺伝子多型	原
佐久間　慎	競技馬の白血球性状の変動	半澤
鈴木　貴嗣	産卵ウズラの生理的性状	原
住田　峰衣	黒毛和種子牛死亡の候補遺伝子 PICALM の変異探索	平野
高橋慎太郎	特定農家における黒毛和種枝肉関連遺伝子効果検証 1	平野
中牟田泰央	ニホンウズラ TLR4 遺伝子多型	原
橋本　諭	家禽を対象とした免疫学的去勢により生理的変化	半澤
林　欣生	競技馬の赤血球膜浸透圧脆弱性に対する温度および pH の影響	半澤
久永　伊吹	ホロホロチョウ肉生産の利点と欠点	原
樋山　颯	黒毛和種の RBP1 遺伝子多型と枝肉形質の関連	平野

家畜飼養学研究室

家畜飼養学研究室は庫本高志教授、林田まき准教授、黒澤亮助教のご指導の下、大学院生二名、四年生三十二名、三年生二十五名で構成されています。この研究室では、動物の生理的恒常性を維持するために必要な栄養素やその消化、吸収、代謝について基礎栄養科学的手法から、分子生物学的手法や新しい分析方法を用いた研究まで幅広く行っています。牛や豚、鶏、ヤギなどの畜産動物だけでなく、マウスやザリガニなどの小動物、ウズラやダチョウなどの鳥類、野生動物であるエゾシカなど様々動物を研究対象としています。

研究室活動は、今年度は行えませんでしたが例年は室員の交流を深めるために歓迎会や納会などを行っています。そのほかにもオンラインで卒業論文発表会などが行われ日ごろの成果を発揮する場となりました。

とてもユニークで仏のように優しい先生方ばかりでコロナ禍ではありましたが楽しい研究室生活を送ることができました。

氏名	卒業論文題目	指導教員
井崎　幹太	ACIラットの偏腎原因遺伝子Renag2の染色体マッピング	庫本
鈴木　百香	アトピー性皮膚炎を悪化させる食餌成分の特定	庫本
加土井紗月	マヌカハニーによるアトピー性皮膚炎の治療	庫本
加藤　七香	ゲノム編集技術を用いた偏腎原因遺伝子の解析	庫本
鈴木　万友	新たな肉用ウズラの開発	庫本
千原　紀祥	肉牛肥育農家における調査研究	林田
渡邊　歩美	クロシロエリマキキツネザルの飼養現況の調査	林田
岡田　翔吾	ニホンジカによる農林業被害に関する意識調査～骨格標本展示による情報提供の補完～	林田
佐々木　翼	エゾシカ短期飼育牧場の牧草中ミネラル含量における牧場間差異	林田
宇都宮遥斗	農家の放牧ヤギが採食する野草の成分含量	林田
根本　茂壘	フィリピンにおけるマメ科樹葉を与えたヤギの血液中ミネラル濃度の変化	林田
半谷安紗美	スピルリナの子牛代用乳原料としての活用	黒澤
秋山　壮太	ブロイラー飼料におけるファイトジェニックス効果の検証	黒澤
大崎　翔太	ストレスマーカーとしてのアミラーゼのブタにおける評価	黒澤
大久保光貴	反芻動物の乳汁中機能性成分の比較	黒澤
落合　祐輔	ペピーノ給与がウズラのタンパク質代謝に及ぼす影響	黒澤
筑紫　大貴	ウズラにおける卵殻成分の胚への移行推移の検証	黒澤
中村　勇樹	ザリガニ餌中ミネラルの有用性について	黒澤
北須賀湧太	ダチョウの産卵周期と血中成分の関係性	黒澤
木下　雅人		
大畑　夏帆		
石塚　翔		
三觜　祐奈		
横川　紫乃		
石井　愛菜		
小川　真由		
中村　海		
大内　樹		
佐藤　右京		
早乙女達也		
山下みどり		

畜産物利用学研究室

本研究室は、多田耕太郎教授、入澤友啓准教授のご指導のもと、大学院M二生一名、M一生一名、四年次生三十三名、総勢三十五名で構成されており、先進的な加工・分析技術を用い、新しい畜産食品の研究開発に取り組んでいます。

主に乳・肉・卵に含まれる各種成分の化学・物理的特性や栄養・生理的機能特性を品種、個体、分子レベルで研究しています。

また、先進的な食品加工技術である超高圧処理を用いた新しい畜産食品の研究開発、有用微生物による発酵を利用した畜産発酵食品の研究開発、さらには未利用状態にある畜産副産物（内臓、皮など）を活用する研究を行っています。得られた研究成果は食品の機能性や保存性の向上、製品加工工程の改善および新しい加工法の開発に利用されています。

研究活動では、三年次にハム・ベーコンをはじめとする各種畜産食品の製造実習、また食品の一般成分分析や生菌検査等の実験手順や操作方法を学び、四年次の卒業論文実験に活かして、より精度の高い研究を重ねていきます。年間を通して、新入生歓迎会、総会、納会、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会等を行い、互いの絆を深め、研究室の更なる発展を目指して活動しています（令和二年度は前述の活動を自粛した）。

氏名	卒業論文題目	指導教員
市川　羽奏	発酵卵白製品の開発	多田
今村月希湖		入澤
伊藤　永遠	高圧処理がアクトミオシンのゲル化に与える影響	多田
生田目郁哉		入澤
牛田　華乃	粉乳を原料としたチーズの製造	多田
臼田　萌		入澤
落合　彦太	冷凍による牛乳の性状変化に関する研究	多田
増田　紘也		入澤
小野寺舞理	高圧処理が動物性タンパク質のゲル化に与える影響	多田
増田　萌子		入澤
尾鼻　政隆	発酵乳酸菌を応用した畜肉加工品の開発	多田
鈴木紀英瑠		入澤
松岡　由樹		
後藤　歌菜	減圧処理が原材料とその加工に与える影響	多田
早乙女敦美		入澤
酒井　梨那	麹を用いた新規チーズ様食品の開発に関する研究	多田
田邊　えま		入澤
佐藤　勇佑	アルカリ電解水による食肉の品質改良のメカニズムに関する研究	多田
寺田　楓麻		入澤
新藤　万里	新規発酵製品の開発に関する研究	多田
杉浦　成美		入澤
能登日向子	畜肉を用いた味噌様発酵調味料の開発	多田
		入澤
畠山　佑香	発酵卵黄および発酵全卵の開発	多田
野村　香		入澤
藤原　由衣	各種ホエイの性状とその加工に関する研究	多田
矢野　郁弥		入澤
東郷　圭		
保坂　春太	畜肉を用いた味噌様発酵調味料の開発	多田
宮田　琉		入澤
松澤　琉貴	高圧処理および麹添加による新規豚内蔵加工品の開発	多田
山口　樹生		入澤

家畜衛生学研究室

家畜衛生学研究室は、加田日出美教授、鳥居恭司教授、小林朋子准教授のご指導の下、大学院生二人、四年生三十一人、三年生二十六名で構成されています。本研究室では、各自で希望する家畜別に牛班、鶏班、実験動物班の三班に分かれ、動物たちの健康を維持するとともに飼育管理を通して各動物たちへの接し方、育て方を日々学んでいます。

調査研究としては、家畜衛生及び食品衛生を対象に農場や食肉のサルモネラ汚染、農場における牛伝染性リンパ腫ウイルスの感染要因や遺伝子解析、カビの汚染や発育、嫌気性菌・毒素の研究、などを大学院生、学部生と共に進めています。

研究室活動はコロナ禍で制限されたものになりましたが、収穫祭への参加（バーチャルポスター作成）、慰霊祭、外部の先生方による特別講義、卒業論文発表会を行いました。これらの行事を通して各員は団結を深め、個々が目的を持って有意義な研究室活動を行っています。

なお、令和二年度の卒業論文の題目は次の通りです。

氏名	卒業論文題目	指導教員
明吉　愛実	神経由来細胞を用いた微量なボツリヌス抗毒素の検出方法の確立	鳥居
池田　聖	神奈川県におけるSFTSウイルスおよび近年問題となっている伴侶動物疾病の抗体調査	加田
池田　麗名	病変ブロイラー血清の生化学的性状解析	鳥居
石井　佑果	神経由来細胞を用いた微量なボツリヌス抗毒素の検出方法の確立	鳥居
伊東　舜	Salmonella Agonaの全ゲノム解析によるクローン菌株の解析	鳥居
今田　大河	病変ブロイラーの病理学的解析調査	鳥居
鵜木　晶子	カビ毒の文献的調査	鳥居
蛯名　彪美	神奈川県の酪農家における牛伝染性リンパ腫ウイルスの感染状況調査	小林
大木　遥来	サニタイザーの尿石溶解効果評価実験	鳥居

大西舞衣子　コウモリの内在性デルタレトロウイルスの検出　小林

金子　文樹　搾乳管理と乳房炎に関係する農場の調査　野口

釘丸　朋子　リコンビナントウェルシュ菌CPILEの作製　鳥居

澤橋　菜々　Salmonella Agonaの全ゲノム解析によるクローン菌株の解析　鳥居

関戸　彩　牛伝染性リンパ腫ウイルス感染を迅速に診断するシステムの構築　小林

瀬谷　悠資　ブロイラーの浅胸筋の病理的調査　鳥居

高橋　歩夢　敷料の違いによる牛床の環境性乳房炎起因菌数の調査　野口

土屋　颯馬　ブロイラーにおける細胆管、胆嚢および膵臓の壊死の原因の究明　鳥居

西内　遼祐　サニタイザーの尿石溶解効果評価実験

西本　耕生　神奈川県におけるSFTSウイルスおよび近年問題となっている伴侶動物疾病の抗体調査　加田

橋本　凌汰　リコンビナントウェルシュ菌α毒素による抗毒素の作製　鳥居

日高　仁晴　Penicillium及びAspergillusの生物特性　鳥居

藤原　早織　Salmonella Agonaの全ゲノム解析によるクローン菌株の解析　鳥居

堀内邑希子　神奈川県の酪農家における牛伝染性リンパ腫発症リスクに関する解析　小林

松宮　桃香　ボツリヌス毒素のガン性疼痛への効果　鳥居

丸山　紘輝　蜂蜜におけるボツリヌス菌汚染査　鳥居

宮川　武大　神奈川県におけるSFTSウイルスおよび近年問題となっている伴侶動物疾病の抗体調査　加田

宮澤　敦士　サニタイザーの尿石溶解効果評価実験　鳥居

山内理絵奈　Cladosporium及びPenicilliumの養成分による発育の差　鳥居

山口真由子　養豚企業における農場HACCPの調査　鳥居

鈴木　勇武　リコンビナントウェルシュ菌α毒素による抗毒素の作製　鳥居

ふじみの寄稿原稿（教員）

寄稿原稿

畜昭和61年3月卒業

久保田　文　恵

畜産学科を卒業し、30年余りがたちました。動物のことが勉強したいとの思いで畜産学科に入学、初めて学ぶ専門科目の内容がとても面白く、あっという間の4年間でした。昨年末、初めてタイに旅行する機会がありました。ただの観光旅行とは違い、野生生物保護区内の施設に滞在し、朝のバードウオッチングから始まり、日中はピックアップトラックの荷台に乗って移動し、林道やネイチャートレイル、水場などで動物を観たり、足跡や痕跡を探したりという、野性味溢れた5日間を過ごしてきました。比較的よく観た動物は、川辺にやってくる多くの鳥たちや繁殖して野生に返したシカなど。警戒心の強い夜行性の大型動物たちは、なかなか観ることができません。それでも足跡などの痕跡は観ることができます。トラの足跡やマーキングの跡、ゾウの足跡やフンなどなど、ゾウは鳴き声を聞くこともできました。日本の日常では味わえない体験の毎日でした。滞在中、食事は施設内の食堂で食べるのですが、その食堂の物陰にはトッケイヤモリがいて、前の林にはサルやリス、大きなトカゲもやってきます。そして、セキショクヤケイも。色鮮やかなオスが、数羽のメスを引き連れてやってきます。食事も早々に一人で写真を撮っていました。また、川沿いの野生動物の観察小屋に行き、シェードの隙間からバンテンを観る機会もありました。1頭の大きなオスが数頭のメスを引き連れた小さい群れがいくつか来ていました。数百メートル離れた川の向こう側にいても、シェードの陰から人間が観ていることはわかっていて、とても警戒心が強くこちらの気配を敏感に察していました。オレンジに近い赤色に白いソックスが印象的でした。トラやゾウを観るのと違い、一緒に参加した他の方々には、セキショクヤケイは普通のニワトリに見えたかもしれません。バンテンにしても、警戒心の強い赤色のウシを見たとの感覚だったと思います。この「ふじみの」を手にしていただいている方は、ご存じだと思いますが、セキショクヤケイもバンテンも、畜産学科の授業で習った動物たちです。30年以上前に、教科書や図鑑の中でしか見たことの無い動物たちが、目の前で生きて動いていて、しかも野生。何とも言えないワクワクした気持ちでいっぱいでした。

私たちの一番身近な動物は、イヌやネコではなく、畜産物に姿を変えたウシ、ブタ、ニワトリなどの家畜や家禽だと思います。畜産学科は、動物科学科に名称変更し、「畜産」という言葉が学科名からは無くなってしまいますが、家畜や家禽も含めた動物たちを学べる学科であることに、違いはないと思っています。

農大の職員として

家畜飼養学研究室
酒井　孝徳

東京農業大学　畜産学科家畜飼養学研究室平成15年3月に卒業して、農学部富士農場でお世話になっています。

私は卒業後、千葉県にある農業高校へ4年間お世話になりました。農業高校出身であった私は畜産を学んできて興味をもち、それを今度は伝えていければと考えて務めてきました。しかし、経験が少ないため、知識を教えても現場作業で教えるのは限られており、学校によっても動物の扱い方の違いがあることや、特にトラクター等の作業機械の扱いには、戸惑いや悩みを痛感した記憶があります。自分が経験をもって磨かなければ、学生生徒に何も伝えることができないことを大学卒業後、早いうちに経験したことが現在の勤務先でも活かす勉強になったと今は思っています。

そして、恩師たちの誘いがあった縁もあり、平成20年度4月から農学部富士農場で家畜部の技術職員としてお世話になってします。高校で勤務していた時と違い、実習するための家畜を育てること、教員の方が実習教材を用意すること、学生の皆さんに実習の作業を援護していくのを役目として行っています。技術職員として家畜を維持していくのはもちろんのこと、さらに良い家畜を飼育して、実習等に活用でんきるように課題をみつけていく必要があります。私は主に家禽（養鶏等）部門として担当してきました。採卵鶏や観賞用の鶏等を実習で活用してきましたが、特に鶏以外にホロホロチョウと呼ばれるアフリカ原産の鳥を飼育していました。その鳥は肉用として利用されていますが、富士農場では卵としても利用されています。採卵鶏と比べて卵は小さく、年間の産卵個数も3分の1程度しか産みません。しかし、鳥の中でコレステロールは低く卵白が少ないため食べやすいのが評判となっています。私が学生時代に実習のため富士農場で食事の時にはホロホロチョウの卵があり、鶏卵の3倍ぐらい殻が固いため割づらく。それをも楽しみであり、私もふくめ富士農場で実習した卒業生には印象のある卵であったと思います。

ホロホロチョウ生産の課題としては流通としてはあまり普及していなく繁殖が低い状況から、人工授精による自家孵化で増やす試みを行ってきました。そのきっかけがあったため、実習だけでなく教員の方からの研究に協力することや厚木キャンパスではプリンやカタラーナ等の生産物として販売するなどのホロホロチョウについてより多くの方に知ってもらうように活用させて頂いたことに感謝しています。

実習に関しては、平成30年から1学年は動物科学科だけでなく、植物や昆虫・食品に関わる農学科・食農デザイン学科・生物資源学科も富士農場で実習を行うようになりました。家畜に関わりのない学科の学生の皆さんに上手く実習ができるのか心配することがありましたが、私が想像した以上に率先して家畜の管理作業を行ってくれたこと、家畜に興味をもって頂いたことに嬉しく思っています。

これから稲花小学校の生徒が初めて体験する予定があります。その学校だけに関わらず、多くの学校や学科からも少しでも興味をもって農場を活用して頂けたらと考えています。そのためにも、自分の技術をより多く獲得して、学生の皆さんに充実した実習や体験をしていただけるように努力していきたいと思います。日本の大学で最後の畜産学科はなくなりましたが東京農業大学農学部として未来につながる学科・農場となって行ければと思っています。

畜産物利用学研究室…これまでこれから

畜産物利用学研究室
多田　耕太郎

畜産物利用学研究室の歴史は、昭和24年（1949年）まで遡り、新制大学令により、茂原分校農場に千葉農学部畜産学科が設置されると同時に開設された「畜産製造学研究室」から始まります。当時は、鬼原新之丞先生を中心に学生十数名程で研究室が構成され、次のような研究が行われていました。

「鶏の成長と肉量に関する研究」：動物性タンパク質およびビタミン給与が、鶏の成長促進と肉量増加に及ぼす影響を研究。

「バター製造法に関する研究」：製造時における各種細菌の利用が保存性に及ぼす影響を研究。

その後、昭和34年（1959年）に、世田谷キャンパスへ移転し、昭和40年（1965年）に肉利用学研究室（略称：肉研）と乳利用学研究室（同：乳研）に分離し、それぞれの専門分野で、より深い研究活動が展開されました。また、実習も精力的に行われ、収穫祭では研究室の学生が製造したハム、スモークドチキン、乳酸菌飲料などが販売され人気を博しました。この伝統は現在も脈々と受け継がれています。

昭和62年（1987年）に、肉研と乳研は統合され、畜産物利用学研究室（略称：利用研）が誕生し、平成10年（1998年）に農学部の厚木キャンパス移転に伴い、現在の地に研究室を構えるに至っています。

研究室担当教員は、鬼原先生から始まり、山中良忠先生

（卵利用）、鴇田文三郎先生（乳利用）、高橋 強 先生（乳利用）、古川 徳 先生（乳利用）、松岡昭善先生（肉利用）、渡辺乾二先生（卵利用）、鈴木敏郎先生（肉利用）が歴任され、多くの成果を挙げてこられました。

また、代々に亘り企業との共同研究にも精力的に取り組んでおり、多くの製品開発に貢献し、研究成果が実社会で具現化されています。

現在は、多田耕太郎、入澤友啓、小泉亮輔の教員3名体制で、所属学生は院生と学部生で70名ほどと大所帯となり、畜産物（乳・肉・卵）の化学・物理的特性や栄養・生理的機能特性の研究、超高圧処理を用いた新規畜産食品の開発、有用微生物を利用した畜産発酵食品の開発、畜産副産物である内蔵や皮を食料資源として活用する研究などに日々邁進しています。

畜産物利用学研究室は、牧場から食卓までの畜産流通における最後の段階を専門にしており、卒業生の多くは食品業界において、食卓に笑顔を届けるべく活躍しています。また、公務員、教員など、自治体や学校などで地域のリーダー、次世代育成の担い手としても活躍しています。

平成30年（2018年）の農学部改組に伴い、畜産物利用学研究室は、新設されたデザイン農学科へ移動することになり、研究室名も食資源利用学研究室へと変わりました。畜産学科の畜産物利用学研究室としては、令和3年（2021年）3月に畜産学科の最後の卒業生を送り出して幕を下ろすことになります。しかし、研究室体制の根本はそのままに、利用研として引き続き活動を続けて参りますので、畜産物利用学研究室OB・OGの皆さんの変わらぬご支援をお願い致します。

今後も農大・利用研の輪を益々広げていきたいと思いますので、収穫祭などで、是非とも研究室へお越しください。皆さんの後輩の在学生がお待ちしております。

ふじみの最終号を向かえて

家畜繁殖学研究室
白砂 孔明

私が東京農業大学に赴任してから6年が経過しました。厚木キャンパスに来て最初の仕事は、入学してくる1年生のための準備であり、その教室で出会ったのが『ふじみの』でした。「農大にはこのような情報誌があるのか」と拝見したことを覚えています。

さて、まだ農大経歴が浅い自分が最終号で何を述べれば良いか、全く思い付きませんでした。ボスの桑山先生から「面白い事書いていいよ」と仰って頂きましたので、拡大解釈をして好きなことを書かせて頂こうと思います（面白いかどうかは別です）。

東京農業大学に赴任が決まってから非常に楽しみだったのが箱根駅伝です。2014年1月の箱根駅伝を観戦し、農大を一生懸命応援し、来年からは自分の大学として応援できる！と楽しみにしていました。しかし、私の赴任直後から農大は箱根駅伝予選会の高い壁に阻まれ続けることに…。疫病神でしょうか。いや、2021年こそは必ず予選を突破すると信じています！ということで、私が好きな箱根駅伝監督の名セリフを皆様にも共有頂けたらと思います。

『その1秒を削り出せ』by東洋大学　酒井監督

有名なセリフで東洋大学のスローガンです。酒井監督は32歳の若さで監督に就任し、柏原選手、設楽選手、相澤選手など何人もの一流ランナーを育成した名監督です。私より少し年上なだけなのに、このカリスマ性&育成力で尊敬

しています。チームのために、個人が少しずつでもいいから力を振り絞る、というところに共感を持ちます。この精神を取り入れ、『そのデータを削り出せ』というスローガンで、学生と一緒になって研究に没頭したいです。

『男だろ!!』by駒澤大学　大八木監督

これも見事なセリフです。大八木監督は長期間に渡り監督をされており、優勝回数も非常に多い名監督です。このセリフを言われれば確実に気合が入ります。箱根駅伝ですので『男』となっていますが、性別に関係なく、やはり気合を入れて物事に取り組むことは大事かと思います。大八木監督の名セリフは他にも、『人に喜んでもらえる、必要とされる、感動してもらえる人間になれ』という熱い激もあります。熱い上司って、やっぱり魅力的ですよね。

『業界の常識を疑うこと』by青山学院大学　原監督

箱根駅伝の存在や将来を劇的に変えつつある名監督のセリフです。原監督はもはや説明不要ですね。私は原監督に憧れ（超ミーハー）、原監督の講演会などにも参加し、色々と勉強をさせて頂いています。原監督は、「強いチームを作るためには業界の常識を疑い、大きな世界の流れを直視し、土壌（環境）を整えることが重要である」、という強い信念を持ちながらチームを作り上げ、5回の箱根駅伝総合優勝を実現しています。自身や業界の常識を疑い、それを打ち破ることは非常に難しいですが、これは研究や育成においてブレイクスルーに繋がると感じます。また、原監督が作り上げるチーム（選手）は非常に明るく、「走りたい！強くなりたい！」という気持ちがにじみ出ています。私も、学生が「研究を介して成長したい！」と思って活動してくれるチームを目指していますが、原監督の様には中々上手く行かず、まだまだ修行が必要です。

以上のように、紹介はし切れませんが、箱根駅伝では一生懸命になるからこそ、感動や様々な名セリフが生まれます。これらは皆様の（もちろん、私自身も）今後の人生の成長に活かすことができるのではないでしょうか。近い将来、箱根駅伝における農大の躍進や農大監督の名セリフなどについて、次世代のふじみの（?）で紹介できることを期待しています。

畜産学科から動物科学科へ

家畜生理学研究室
平野　貴

平成6年3月に畜産学科を卒業後、畜産技術協会附属動物遺伝研究所で研究員として18年間勤め、平成24年4月に再び畜産学科に戻って来ました。それから9年もの月日が流れようとしています。有り難いことに毎日忙しく、楽しく、時間が過ぎるのが早く感じます。その中でも、学生の皆さんとのたわいない話を楽しく思っています。ただ、忙しさにかまけてしまうことも多く、反省しきりです。そんな私でも学生の皆さんの役に少しでも立てているなら、大変嬉しく思います。

さて、私が学生時代に通った畜産学科は世田谷キャンパスにありました。今の世田谷キャンパスは、新しい1号館やアカデミアセンター、さらにはサイエンスポートが建設されるなど様変わりしましたが、当時はキャンパス内をヒツジが往来したり、ウマが歩いていたり、イヌが散歩していたりと、そんな雰囲気でした。農場での実習は富士農場で1、2、3年次に行われていました。その頃の富士農場は、ふもとっぱらのキャンプ場も農場の敷地だったため広く、1、2年次の実習では何台かのバスを使って学年全員200名程が一度に行き、夏休みに1週間の日程で行われていました。その間、男子は大部屋に50人ずつで寝泊まりしていたことや、台風直撃により帰れず非常食を食べたことは、いまや良い思い出であり、話のネタになっています。そして、夕日に照らされた富士山が赤く、非常に美しかったことを覚えています。今のように手軽に写真に残せなかったのが非常に残念です。このように、規模は違いますが大人数で富士農場へ宿泊で実習に出かけていましたし、各学年の人数が多く、実験実習も何人かのグループで行うなど、今と基本的なスタイルは変わらないものでした。所属する研究室は大所帯になりますが、これも農大の良い特徴かもしれません。

以前勤めていた研究所では、各道県の畜産試験場を始めとする畜産関連研究機関と共同研究を実施していました。このような研究機関には、農大畜産学科の卒業生が働いているところもあり、一緒に仕事する機会もありました。そんな同窓生に対しては、嬉しいような特別な思いがありました。こういった母校に対する感覚は他大学の方も同じと思っていましたが、私の兄や弟をみていて、これは農大に特有なものと感じるようになりました。多くの卒業生が収穫祭や研究室のイベントに毎年のように参加して下さり、農大や後輩達に愛着を持って下さっているのだと感じます。そして、農大卒業生には関わりのある人に対して愛着をもって接することができる人が多いのだと思わせてくれます。これは、実習や研究室活動だけではなく収穫祭を作り上げることなど、仲間で一つのことを成し遂げるという農大の特徴がそうさせてくれているのかもしれません。

私の人生は農大に入学してから、大きく動き出したと思っています。そして、これまでにいくつかの大きな転機がありました。そこには多くの人が関わって下さっていて、人との繋がりがとても大切なことを実感しています。これから皆さんにとって大切だと思える人が現れてくると思います。農大の卒業生として人との関わり合いを大切にして、それぞれの場所で大いに力を発揮し、活躍されることを願っています。

農学部改組で畜産学科から動物科学科へ名称変更され、令和2年度で3年目となります。いよいよ動物科学科の学生が研究室に所属してきます。そして、畜産学科は所属する学生が4年生だけとなり、残すところ1年となりました。東京農業大学の動物科学科として、畜産学科の先輩方からいろいろなものを受け継ぎ、先輩達には多くのもの残していっていただき、その相乗効果でさらに発展・盛り上げていけたらと思います。そして、畜産学科卒業生の皆さんには変わらずに動物科学科を見守り・支えてもらえたらと思います。収穫祭などで大学に来られたときには、また、たわいない話ができたら嬉しく思います。

「印半纏」

家畜衛生学研究室
野口　龍生

例年であれば一年で一番寒いはずの富士農場に、春の訪れを告げる蕗の薹が芽吹きだした令和二年二月、本誌の原稿を依頼された。

「何でもよいから」と言われるといちばん困る。さて、何を書いたらよいのか、構想も纏らないうち締め切りが近づいてきたため、仕方なくキーボードを叩出した。

最終号とのことだったため、自分の学生時代のことを思い出してみた。気が付けば畜産学科に入学したのは四十年近く前のことになっていて愕然とした。

当時の学部は農学部のみ、農大生全員が世田谷キャンパス内に居たため、入学式後は部活の勧誘などで活気に満ち溢れていたように記憶している。私はサークルに所属したため、研究室に所属するまではサークル活動中心の生活を送っていた。

畜友会との関わりは一年次のスポーツ大会からだったように記憶している。当時学科対抗で行われ、個人的にはかなり盛り上がっていた。全学科が参加していたので、練習するにもグランドの制約があり、講義時間中にも練習が行われていた。かなり出席にうるさい先生もこの時ばかりは練習に行くと言えば出席扱いにしてくれていた。

声をかけてくれたのが我々の代の統一委員長となった練習生上がりの同級生だった。ただ、今ほど組織立って纏った会ではなかったと記憶している。

収穫祭や体育祭の準備など数名が複数兼務で作業を行っ

ていた。神輿作成も体育祭の櫓装飾も家畜苑も特別企画も北門装飾（経堂駅寄りの道路端）も全て数名が夏休み前より取り組んでいた。後に私は櫓装飾委員長となったが、名ばかりで、夜中の差し入れ担当であった。体育祭も人数集めに四苦八苦した。綱引きは各研究室を回り居る連中をかき集めた。応援合戦に至っては練習などしたことはなかった。当日、「出番が来たらグランドに飛び出して行って手足を適当に動かして帰ってこい」との指示で送り出された。今の学生達はすごいと思う。

収穫祭の前に行われた都内宣伝パレードと経堂パレードは四年間参加した。特に、都内宣伝パレードは、リーダー部、畜産学科と農業拓殖学科（現国際農業開発学科）のみで、高円寺、銀座、渋谷、二子玉川などを四トントラックの荷台に神輿と共に乗って出かけて行った。案の定一度皇居の付近で警察に捕まった。注意のみで済んだように記憶しているが、トラックの荷台で数十人が大騒ぎしながら警視庁前を通るのである。おおらかな時代であった。

これら一連の行事の時、当時の農業拓殖学科は揃いの半纏をすでに羽織っていた。

現在とほぼ同じデザインで、背中と襟の文字が当時の学科名となっていた物だ。私が一年次の畜産は、上半身裸にサラシを巻いて、作業ズボン荒縄のベルト、白長靴の出で立ちに統一させられた。拓殖の半纏がかっこよく見えた。翌年、畜産でも半纏を作った。現在は役付きの学生達が着用している物の原型である。初版であったため、型代込みで一万円した。収穫祭準備が始まると、常に羽織って歩いた。北海道旅行にも着ていった。ホルスタインの全共ではそれまでお会いしたことすらなかった大先輩方からお声をかけていただいた。うれしかったと同時に農大ネットワークの凄さを垣間見た。

学科団結の象徴だった緑の半纏も私の卒業後暫らくして長半纏は品がないなどの理由で一時期使用されていなかったようだ。その時期は、丈の短い半纏を使用していたが、私の感覚が「粋でない」と訴えていた。そこで卒業後十数年経ってから畜友会に寄付した。現行の役付き半纏の基となったのではないかと勝手に想像している。

ところで、半纏に背負っている文字は何と書かれているかご存じの方はどの程度居らっしゃるだろうか。現在の学生さん達に尋ねると様々な回答が得られるが、正解が出てきたためしがない。あの文字は「畜友」と書かれている。我々が背負ってきたものは畜産を通じて出合った多くの学友達である。ただ、この話には後日談がある。実は「友」の字が左右反転しているのである。その理由までは私も知らない。何か深い理由があるのかもしれないが、私は単なる間違えだと思っている。その文字を何の疑問もなく復刻していただいた当たり、畜友会の血脈は途絶えていなかったんだと、妙な安心感に包まれる。

畜友会の思い出は文字に起こせないことが沢山ある。もし聞きたい人が居るならば、酒でも交わしながらじっくりお話ししましょう。

私の宝物

家畜育種学研究室
野村　こう

農学部が厚木に引っ越してから20年がたつが、家畜育種学研究室では世田谷時代、私が研究室の3年生として所属するずっと以前から「在来家畜とその野生原種の遺伝学的解析」を研究の柱の一つにしている。日本在来家畜調査団報告第1号（昭和49年復刻版）によれば、1961年に鹿児島トカラ、奄美から始まった調査は国内に引き続き台湾、フィリピン、韓国、タイ、インドネシア、スリランカといった国外へ、私が研究室に入室してからもミャンマー、ベトナム、ブータン、カンボジア、バングラデシュ、モンゴルなど南・東南アジアから中央アジアまで、現在も現地に入って在来家畜や近縁野生種の調査、遺伝子サンプルの採集を続けている。研究はいくつかの国立大学の先生方との共同で行われてきたが、我が研究室が伝統的に得意としているのは、牛、水牛、ヤギといった反芻動物とブタである。今まで、牛では東南アジアの在来牛はインド系のコブウシに属するが、遺伝子の中に牛の近縁種であるバンテンやガヤール、高地であればヤクの遺伝子がいろいろな割合で混ざっていること、世界の2大水牛であるリバーとスワンプ水牛の世界分布の境界がバングラデシュの東側からミャンマーの西側辺りにあり、両者の遺伝的な隔たりは従来言われるよりずっと大きいことなどを明らかにしてきた。

アジア各地の様々な在来家畜に巡り合い、今も魅惑的な研究対象には事欠かない。たとえばラオス南部の在来牛は、半年に及ぶ乾季の間、特別な飼料も与えられない厳しい栄養条件の中で生き残ってきた個体群であり、周りの輸入改良種が次々と痩せ衰えていく中でもすくすく育つ元気な牛であることから、これらの個体が保有する飢餓耐性遺伝子の解析や、絶滅寸前のスワンプ水牛の野生原種を追う、などなど。そしてこうした仕事に取り掛かりながらも今、研究対象は、世界を回って日本に戻ってきている。一つは日本の在来ヤギ、シバヤギの特性を生かした繁殖性に係る遺伝子の探求である。世界的に有名なスイスの乳用ヤギザーネンは温和で乳量も多く、素晴らしいヤギだが子供を産むのは年に1度、春に限られる季節繁殖型である。一方日本在来種のシバヤギは小型で乳量も自分の子供を育てるのがやっとだが、一年中子ヤギが生まれる周年繁殖型である。これを掛け合わせてみたところ、F1はすべてシバヤギタイプの周年繁殖型となった。その後も交配実験と遺伝子の家系解析を続けて、今のところ周年繁殖の候補遺伝子を幾つかの染色体上の特定箇所に絞り込むに至っている。もう一つはブタの野生原種であるユーラシアイノシシの日本固有亜種ニホンイノシシの遺伝子を徹底的に調査しようというもの。私たちのすぐ身近にいて、日本の自然環境にうまく適応した遺伝構成を持つ貴重な資源でありながら、その遺伝的解析は必ずしも進んでいない。育種研でのミトコンドリアDNA、SRY、マイクロサテライトDNAといった領域の調査から、ニホンイノシシの血統はどうやら九州、四国、中国、南紀、中部と関東、東北の6つの系統があること、群馬と栃木のイノシシにはイノブタ由来と考えられる家畜ブタの遺伝子流入の可能性がありそうな事などがわかってきている。

遺伝資源、農業生物多様性といった概念がまだ世の中の注目を惹いていなかった60年前にその重要性を見抜いた研究室の初代教授、以来、私が学部の3年生で入室する頃には〇〇探検隊などと揶揄されてもずっとこの研究を継続、

発展させてくださった先輩の教授陣、実際に海外現地調査に出向いたり、膨大な実験を何代にも亘って引き継ぎ積み重ねてくれた研究室の大学院生、学生諸君。たとえ来年からの研究室名称が動物遺伝学研究室に変わろうとも「在来家畜とその野生原種の遺伝学的解析」研究はこれからも変わらず引き継いで行く。誇りと感謝と敬愛の念をいだきつつ、東京農業大学農学部畜産学科家畜育種学研究室万歳!!!、畜友会万歳!!!

集う学友

楽しかった農大

家畜育種学研究室
4年　荒　川　　拓　巳

大学に来て3年が経とうとしています。よく、大学生活は一瞬で終わってしまうと言われています。私がその言葉が身に染みるほど分かってきたのはここ数ヶ月のことです。私は3年前にこの東京農業大学の畜産学科に入学しました。高校の時から農業に興味があった私にとって農大に入れた事はとても嬉しい事でした。しかし、私は一般入試ではなく、東京農業大学技術練習生として研修を行い推薦入試を受けさせて頂き入学しました。東京農業大学技術練習生とは何かと言うと、1年間農大の農場で研修をさせていただき、身をもっていろいろな事を体験できるというものです。普通科の高校を卒業した私にとっては何もかもが初めての体験で楽しかったのを覚えています。

寮生活も初めてで、共同の部屋で暮らすという事に戸惑いがありました。

しかし、1年経って見れば、楽しい同期8人と過ごし、得た事はこの先にも必ず役立つ経験だと思います。また、大学に入ってからは多くの練習生の先輩方にお世話になり、とても良い経験をできたと感じています。

今回、大学3年間を振り返って書こうと考えたのですが、まだ途中という大学生活を振り返るのは難しく、文章にまとめる事が難しいので、今後大学を卒業したらしたいことについて書こうと思います。練習生の頃から肉牛に携わってきた私は将来肉牛の現場で働きたいと考えていました。それは、大学に入ってからも変わることはなく、より深く思うようになりました。

大学では、授業を受けることで家畜に対するより多くの知識をつけることが出来ます。また、今年の8月に熊本の肉牛農家さんに研修に行かせていただきました。その際に、畜産を生業にしていく、難しさと楽しさを教えてもらいました。日本で畜産をやるということは難しいと言われている中だからこそ頑張ってみたいと思いました。私の大学生活はあと一年あるので、楽しみながらより多くのことを学べるようにしたいと思います。

令和元年度畜友会事業報告

令和２年６月１日～令和３年３月31日

令和 2 年

12月11日　令和２年度畜友会定期総会

令和 3 年

3 月21日　畜友会誌「ふじみの」最終号発刊

令和元年度 畜友会 収支決算報告

収支決算書　令和元年６月１日～令和２年度５月31日

1-(1).一般会計決算

収入の部　（単位：円）

科目	決算額	予算額	差異	備考
前年度一般会計繰越金	1,001,720	1,001,720	0	
普通預金利息	11	10	△ 1	
合計(A)	1,001,731	1,001,730	△ 1	

支出の部　（単位：円）

科目		決算額	予算額	差異	備考
収穫祭特別会計費		302,319	393,000	90,681	
	統一本部	200,244	200,000	△ 244	慰労会の飲物代、料理代等
	宣伝隊	45,179	20,000	△ 25,179	金物、リングキャッチ、南京錠代
	装飾	0	10,000	10,000	
	家畜苑	35,056	30,000	△ 5,056	グラインダー、衛生研リアカー修理、見本鶏卵代
	体育祭	21,840	80,000	58,160	交通費
	雑費	0	3,000	3,000	
	予備費	0	50,000	50,000	
ふじみの印刷費		276,782	600,000	323,218	ふじみの56号制作費　卒業生200名+制作員20名
畜友会返還費		0	0	0	
繰越金（令和元年度活動費）		0	0	0	
雑費		1,760	5,000	3,240	振込手数料
予備費		0	3,730	3,730	①
合計(B)		580,861	1,001,730	420,869	
収支差額：(A)−(B)		420,870	0	△ 420,870	

令和元年度畜友会役員

令和２年６月１日～令和３年３月31日

役職（教員）	氏　名	研究室
会　長	桑山岳人	家畜繁殖学
副会長	白砂孔明	家畜繁殖学
	高橋幸水	家畜育種学

執行委員	氏　名	研究室
委員長	4年　中牟田泰央	家畜生理
副委員長	4年　橋本　論	家畜生理
庶　務	4年　下鳥誠行	家畜繁殖
会　計	4年　高橋慎太郎	家畜生理
企画・渉外	4年　半谷安紗美	家畜飼養
編　集	4年　大畑夏帆	家畜飼養
監事（教員）	原　ひろみ	家畜生理
	黒澤　亮	家畜飼養
監事（学生）	4年　木原龍成	家畜生理

七十代目畜産学科統一本部　各部門より

好きにやる

統一本部委員長　中牟田　泰　央

私たち、畜産学科統一本部は活動を終え早、1年が経ちました。1年前のつらかったことも楽しかったこともむかついたことも、うざかったこともすべていい思い出になっていると思います。こうやって思えるのもこれまでの4年間を共にしてこれた『仲間』のおかげです。これまで三回も書いた畜友會、最後のふじみのは仲間に感謝を伝えて終わろうと思います。

畜産学科には以前から、統一本部に入っている人、入っていない人を区別できる方法があります。なんだとおもいますか…？それはガラが悪いかそうでないかです。ガラが悪ければ自動的に統一本部の人間だとみんなから思われます。さらに学校の授業には、ペンキのついたニッカかスウェット、上着には畜友會と大きく書かれたパーカー。そりゃ、いかついですよね。統一本部でない人からしたら大学4年間、絶対関わりたくないですよね。しかし、私はそういった団体、仲間たちと4年間過ごし、ここまで来ました。私の大好きな仲間は標準語をかき消す佐賀弁、熊本弁、伊予弁、土佐弁、博多弁、福井弁など様々な方言を話す奴らです。今となっても何を言ってるか本当によくわからない。本当にここが神奈川県なのかもよくわからない。私はこのどこにいるか何を話しているかわからない仲間と出会って楽しいこともつらいことも一緒に経験して4年間過ごしてきました。ここまでこれたのもこいつらのおかげ。つらいこと、なにがあってもこいつらの顔をみれば自然と笑顔になれる。つらかったことなんてなかったことのように帳消しにしてくれる。もう少し、いやまだまだ一緒にいたいなぁ。みんなで一緒にアホして周りなんか気にせずにバカ騒ぎしたいなぁ。しんたろう、きよし、はると、はやと、まさと、さとし、りゅうせい、きょういちろう、しげる、りゅうき、つくし、たかゆき、あさみ、あいまま、かほ、みつき、きせ、れいな、ももりん、りょうすけ、あかはねほんっまに4年間ありがとうございました。めっちゃ楽しかったです。この中でも1年生の頃からずっと初期メンバーとして統一本部にいてくれたみんなには私が統一委員長としてたくさんの迷惑を掛けました。でも、見放さずに協力をしてくれてありがとう。1年生のころの体育祭の最後にパネル前で撮った10人での写真、みんな覚えとるかな？今でもあの時のシーンがずっと記憶に残っています。2年生から統一本部に入ってくれたみんなも、めっちゃ入りづらかったと思うし入ってからの活動もしんどいし、お金かかるし大変やったと思うけど途中で辞めずに最後まで畜産学科統一本部としていてくれてありがとう。本当にみんなには感謝してもしきれないくらいです。ありがとうだけでは済まないくらい感謝しています。

さて、私が畜産学科統一本部、統一委員長として最後までやり遂げることができたのは周りのサポートのおかげでもありますが、1番に私を会計として支えてくれた奴がいます。それは髙橋慎太郎です。彼は2年生から本格的に活動をはじめ、神輿部門という忙しい部門にいながら畜産学科統一本部の会計として統一本部の活動を陰で支えてくれていました。シーズン中、そんな忙しい彼に私は何度も相談しずっと文句も言わずにまるで自分の事のように話を聞いてくれていました。お互いの役職のこともあり、一緒にいる時間が多く、周りからは本当に付き合っているのではないかと絶対にしてはいけない勘違いをされたことも懐かしく思います。しんたろー、会計に勝手に選んでごめん。でも文句言いながらでも最後までやり切ってくれてありがとう。「悩んでも、しゃーないけん。やるしかないやろ。」しんたろうのこの言葉に

むっちゃ助けられた。ほんまありがとう。
そして、各部門を引っ張ってくれた隊長のみんな。こんな自分を信じてくれて、いつまでも見守ってくれて、本当にありがとう。
きよし。最後までどんな神輿になるか全然想像がつかへんかった。畜産の神輿がいっちゃん輝いてたで。あんたが隊長でよかった。1年の頃から絡んで楽しいこと、バカ騒ぎいっぱいしたなぁ。
「わいさ、おいさ」俺大好きやで（笑）ありがとう。
きせ。あんまり手伝いに行けへんくてごめんな。2年の時はもうやめるって家畜苑の階段で話したな。でも最後まで装飾部門の隊長としてはるとと協力して頑張ってくれてありがとう。
あさみ。見た目めっちゃ強そうやのにめちゃめちゃ弱いな。櫓で2位とれたのも最後まであさみとあいままが諦めずに頑張ってくれたおかげ。あんなに良い絵はどこの学科探してもない。ありがとう。
ももりん。あんたはほんまにさとしと色々あったな。でも、折れずに最後まで前夜祭から本祭まで盛り上げようと頑張ってくれてありがとう。
りゅうせい。去年よりスムーズにいったけど本祭直前にバターづくり体験のクリームを間違えて植物性のクリームを買うのはえぐいで（笑）色々あったけど家畜苑があんなにうまくいったのはりゅうせいのおかげや。ありがとう。
かほ。シーズン中、ほんま色々あったな。その都度、ずっと泣いとったな。一人でつらい時しかなかったと思う。でも、みんなの前では絶対笑顔でおってくれたな。やからこそ、あれだけ良い応援合戦ができた。それはかほが隊長やったからや。ありがとう。
りゅうき。厚パレ、本祭であれだけ盛り上がれたのは宣伝部門の隊長であるりゅうきが枯れるまで声出してくれたから。研究棟の喫煙所でいっぱい話したな。りゅうきの意見に助けられることばっかやったわ。ありがとう。
またみんなでいつか再会していつものように騒いでこの時の話でもしような。自分の代がこのメンバーでよかった。本当にみんなありがとう。
この畜友會最後のふじみの、57刊をこういう形で締めくくるのはおかしいと思いますが、本当にこの「仲間」のおかげで今の私があります。畜友會最後であるため何を書こうか本当に悩みました。本来なら歴代の先輩方に向けて、私たちの活動をサポートしてくださった先生方へ感謝の思いを伝えるのが正しいとは思いますが前文でも申し上げました。私が4年という長い時間を共に過ごした仲間に向けて書きたいという気持ちが強く、こういった形で最後を締めくくらせていいただきました。
畜友會の歴史を共に歩んできたふじみのもこれで最終刊となりました。また新しい形で畜友會のような素晴らしい団体を後輩たちに作っていただきたく思います。来年度からの動物科学科の益々のご発展とご多幸を願って私、中牟田泰央の言葉とかえさせていただきます。
4年間本当にありがとうございました。

わいさおいさ

神輿部門委員長　池田　聖

畜産学科統一本部を通していろいろなことを学びました！最後の畜産学科として収穫祭をみんなで盛り上げてきました！自分は先輩達の誘いで入ってなんもわからない状態からいろんな部門を手伝って二年で神輿部門に決まり、三年で神輿部門を背負わせていただきこの三年間シーズンを苦しかったりキツかったりとしたけど楽しいことも多かったです。
みんなで協力して1つのことを達成する難しさやみんなで頑張る協調性、人の気持ちを理解してお互いに頑張るためにも声をかけあうだからこそいろんな意味で人として成長できる統一本部はすごいシステムだなぁと感じました。
自分はみんなに助けてもらうことばかりで迷惑かけたと思うけど最後の畜産学科には恥じない素晴らしい収穫祭にできたと思います！
神輿を見に来て頂いてる方々や大根踊りを楽しみに待ってる方々など沢山のお客様に来ていただいてる収穫祭を自分らで盛り上げて学生だからこそできる統一本部としてここまでやってこれて本当に良かったです。楽しかったなとかきつかったなとか未だに同期の仲間や先輩後輩と話してます。一生の思い出に残るものそれが東京農業大学厚木キャンパスの収穫祭でした！
来年からまた新しい学科となりいろいろ違う収穫祭になってくるとは思うけど後輩たちが新しく農大生としてまた違った収穫祭にしてくれると思います！

個性

神輿部門　池田　麗名

「来年は、楽しく三人でやっていけるのかな。喧嘩するだろうな。」
昨年度のシーズン終盤の大きな不安でした。先輩方がいてくれるおかげで雰囲気が良く楽しいシーズンになり、また、自分の代がトップとしてやっていかなきゃいけないことに大きな不安を感じていました。三人は個性が強く衝突しないわけがないと思っていたからです。そして、あっという間に今年度のシーズンが始まってしまいました。
畜産学科統一本部最後の神輿は、去年よりかっこよく、「三人らしい神輿」を目標としました。今年は話し合いもせず一から作り出しだったので、時間もなく急ぎ足で作業を進めていかなければなりません。初めから人も集まらず、何から始めていいか、どのように進めていくのか、三人ともわからない状況で始まったためスタートダッシュからバラバラでした。
完成式が近づくにつれ焦りと不安で溝が深まっていってる気がしました。そして恐れていたことに、衝突してしまったのです。それぞれこうしたいという気持ちを話合いました。
しかし、衝突したことによりやっと三人が同じ方向を向き、同じ歩幅で歩き始められました。そこから、神輿の雰囲気もガラッと変わり目標としていた「三人らしい神輿」を作ることができました。そして今年も1位を頂くことができました。
無茶苦茶たけど手先が器用で考えるより行動派な聖、細部にまでこだわって慎重だけどちょっと抜けてる慎太郎、この二人が同じ部門・同じ代でよかったと心から思います。
ありがとう。

畜友会で得た宝物

神輿部門　髙橋　慎太郎

不安だらけの2年前、僕の畜友会としての活動は始まった。畜友会に入ったきっかけは泰央だった。1年のときに作業に行ってなかったこともあり、本格的に入るのを迷っていた時期に声をかけてくれたこともあって自分も決心がつき入ることにした。部門は入る前から神輿に決めていた。収穫祭の練り歩きで先輩たちが神輿を担いでいるのを見て率直にカッコいいと思ったからだ。2年生の時に優秀賞を頂き、迎えた3年生。自分たちの代が畜友会が最後の年ということもあり、正直とてもプレッシャーは感じていた。最後の年は、担ぎ棒から作るということに全員で決めて作業し始めたが、最初はなかなか全員のスケジュールが合わず思うように進まなかった。しかし、夏休みが明けて、全員が揃ってからは早かった。失敗を繰り返しながらもある程度の形になっていくのを見ていると楽しかった。また、自分たちは、後輩にも恵まれたとつくづく思う。終夜続きで辛い時期でも、作業が終わるまで帰ろうとしないのでこっちが心配になるくらいだった。シーズンも終盤に差し掛かった頃、隊長の聖の提案で神輿にチェーンを巻いた。すごく斬新でぶっ飛んだ感じが畜友会らしくてすごく面白かった。収穫祭当日は、練り歩きでの皆んなの協力もあって、僅差で目標としていた優秀賞を取ることができた。今までの苦労を思い出すと涙が出るほど嬉しかった。最後の最後まで5人で突き詰めた畜産の神輿は、誰が何と言おうと1番の神輿だと思う。これもひとえに神輿部門の5人はもちろんのこと、作業を手伝ってくれた畜友の仲間たちのお陰だと感じている。聖、麗名、善巧、花菜ちゃん、本当ポンコツで何するにしても失敗してばっかりの俺やったけど相手してくれてありがとう！

体育祭もすごく思い出に残っている。体育祭部門は本当に頑張ったと思う。特に委員長の夏帆は沢山のプレッシャーがあったと思うけどクセしかないこのメンバーをまとめ上げ、総合2位という結果を取った事は本当にすごいことだと思う。これから先、声が出なくなるまで応援したり、本気で悔しがったりする事は多分ないと思うと、一生忘れることのない思い出なんだと実感する。こういう思い出や仲間が出来たのも畜友会に誘ってくれた泰央のお陰だと思う。ありがとう。皆んな社会に出たとしてもまた集まってバカなことしたいなと思う。

感謝

体育祭部門委員長　大畑　夏帆

二年生の体育祭の日、応援合戦が入賞しなかったのが悔しくて悔しくて、来年は絶対に優勝して最後の畜産学科統一本部を締めくくろうとりょうすけと約束しました。そんな最後の一年はとにかく厄年で毎日何かしら問題が発生し、その都度その都度色んな人に迷惑をかけ、後輩に辛い思いをさせて、そんな自分が体育祭部門の委員長として情けなくて悔しくて、毎日泣いてばかりでした。

そんな私を助けてくれたのは紛れもなく三年生のみんなです。私を一人にしないように毎日終夜を誰かが手伝いに来てくれたり、話を聞いてくれたり、たくさん笑わせてくれたり、一緒に泣いてくれたり、みんなにだって自分の部門の仕事があって大変なはずなのに、気にかけてくれた人が何人もいました。私はみんなの優しさに何度も何度も救われたし、みんながいたから最後まで頑張ることが出来ました。一人ずつお礼を言いたいくらい感謝しています。至らないことづくしの体育祭部門だったけど最後までついてきてくれてありがとう。

みんなで何かに一生懸命になって、朝まで作業して、ひとつの物作って、喧嘩したり、ふざけあったり、肩組んで歌ったり、海に行ったり、そんなTHE青春な時間を過ごした畜産学科統一本部は私の大好きな場所です。演舞の最後のみんなが法被着た後ろ姿、一生忘れません。

そしてそんな場所を作ってくれた泰央。統一っていう立場がいかに大変でしんどいか、そして泰央がどれだけみんなのことを思って動いてくれてるのかこのシーズンでよく分かったし、わかればわかるほど泰央が統一委員長で良かったと心の底から思いました。沢山助けてもらったのに優勝旗持たせてあげれなくてごめんね。ほんとにお疲れさまでした。そしてありがとう。

卒業しても、離れ離れになっても、またみんなで集まってバカなことして笑おうね。みんなと出会えたのがこの七十代目畜産学科統一本部で良かったです。たくさんの思い出をありがとうございました。

ふじみの

家畜苑部門委員長
木原　龍成

あっという間の三年間。一年生から続けてきた畜友會の活動にも終止符が打たれ早くも4ヶ月が経ちました。この3年間では、様々な事を体験し考えさせられ、良くも悪くもたくさんの思い出を作る事ができました。当初、畜友會に入った頃は右も左も分からずに先輩方が収穫祭を盛り上げる為に、夏休み頃から活動してるからとりあえず来てみなと誘われ、柄の悪い人達やなと思いつつ恐る恐る手伝いに行った記憶があります。一年生時は、先輩方の手伝いを行いながら来年度にどの部門へ入りたいのかアンケートがある為、ある程度自分の中では決めておき、頻繁に手伝っていた家畜苑を第一希望としてアンケートを提出しました。部門が決まり家畜苑の一員として来年度からは本格的に活動する事が決まりました。二年生になり先輩方と収穫祭に向けての準備が始まり、主に二年生は家畜苑広場の頭となる門を制作しなくてはならなかった為、皆んなで試行錯誤しながら進め、なんとか完成させることができました。迎えた当日も沢山のお客さんが来場して下さり大いに楽しんで頂く事ができました。そして三年生になり、いよいよ自分達が主となって畜友會を牽引していく立場となりました。自分は先輩から家畜苑の委員長を託されたので色々と責任も重大でした。また自分達の代で畜友會としての活動も最後の年でもあった為そこに対してのプレッシャーも大きく同年代の皆んなを始め、各部門の委員長は相当な重圧を背負って活動してきたと思います。自分達の部門である家畜苑は特に順位がつく部門では無かったので色々な人の支えがあり大変な時期もありましたがなんとか無事に当日も迎える事ができ成功を納めました。それとは一変、連覇のかかっている御輿部門、特別企画で前夜祭に行うNCNは相当なプレッシャーを跳ね除け見事に連覇を成し遂げたのはよく頑張ったなと思います。上からもの言ってる様にはなりますがお疲れ様の気持ちでいっぱいです。また、体育祭部門と櫓部門の委員長である夏帆と安沙美も相当、色んな事を堪えながら頑張ったと思います。お疲れ様。

結果も見事、厚木の三学科で1、2、3位を独占できて良かったと思います。それから統一委員長の泰央。お前が一番辛かったと思う。それながらよく堪え全部の部門を纏めて挙げたのは見事でした。お疲れ様。

話せば、話題は尽きませんがこの辺で終わりにしたいと思います。この畜友會で得たものは一生の財産だと思うので大切にしていきたいと思います。皆んなありがとう。

収穫祭

家畜苑部門
木下　雅人

私は大学一年生の頃から畜産学科統一本部に携わせてもらいましたが、四年生になった今改めて入っていて良かったと感じます。一年生の頃は手伝いという形でしたが二年生になって本格的活動が始まり、収穫祭は裏でたくさんの人が支えているからこそ成り立つと気づきました。私は家畜苑部門に所属しており、富士農場の家畜動物を前夜祭の時から世話をしていましたが、練り歩き、体育祭などどうしても世話ができない時富士農場の練習生や一年生の手伝いがないと成り立つことができない部門でした。

同期、後輩には本当に恵まれていたと思います。私自身家畜苑部門の七人は勿論、他部門の同期、後輩も気軽に話しかけてくれて、よりシーズンが楽しく過ごせました。その時、収穫祭、体育祭など結果を求めている自分からそれ以上に大事なことに気づいた自分がいました。特に統一委員長、副統一委員長、家畜苑長の三人には感謝しています。統一委員長は個性が溢れすぎている同期の二十人のわがままをうまく立ち回ってくれて何事も問題なく成功させてくれた主因は統一委員長のおかげだと思います。又、後輩に対しても一人一人声をかけ、気にかけている姿を見て私自身学ぶことがたくさんありました。副統一委員長は同じアルバイトをしている中、夏休みから学校に来て各部門に顔を出し、新しい一年生に自分から積極的に声をかけている姿など、後輩とは思えないほどしっかりしていました。来年度のシーズンも忙しいと思いますが、健吾を中心に頑張ってください。心から応援しています

家畜苑長は常に怒ることなくみんなに優しく接し、みんなから頼られる存在でした。しかし、今シーズンは頼られ過ぎて歯車が狂い爆発したと思います。その時僕はそばにいて命がなくなる覚悟でした。もう少し私が家畜苑長から頼られる存在になれれば良かったのかなと今でも思います。又、後輩のために来年度以降使える機具を買うなど、視野が広くて家畜苑長が龍成さんで良かったです。

最後に三年時のシーズンが終わるまでし正直きついです。なんで畜産学科統一本部に入ったんだろうと思う時期があると思います。しかし、終わった後にはそれ以上に得られる物が大きいです。後輩のみんなは辛抱強くかつ楽しく頑張ってください。

キマッた。

家畜苑部門　下鳥　誠行

「お、今日もキマッてるねぇ。」神輿小屋に行くと「おはよう」や「お疲れ様」よりも先にこの言葉が聞こえてきた。初めは、何を言っているのかよくわからなかった。そんな中、畜産学科統一本部（畜友会）最後のシーズンがスタートした。今年で畜産学科、畜友会が最後ということもあり全員かなりチカラが入っていました。

私は、家畜苑部門を担当していました。今年の家畜苑は頭より先に体が行動する三年生四人と、計画的に卒なく作業をこなす二年生三人というバランスの取れた計七人でした。家畜苑としての作品は、三年生一人一人の思いのこもった四枚絵、二年生の鳥居をモチーフにした門、一年生の個性あふれるベンチの装飾や牛の模型の装飾、どれもかなりの出来栄えで畜友会最後の作品として胸を張ることができました。収穫祭当日は多くのご来場者の方に足を運んでいただき無事大盛況で終了することができました。家畜苑をまとめた龍成をはじめ、雅人、颯、貴弘、誠昇、夏美ちゃんありがとう。このメンバーだったからこそ最高の作品を作れました。

畜友会全体を見ても体育祭総合二位、櫓一位、神輿優秀賞、NCN一位といった良い成績や、厚木パレード、装飾の垂れ幕、家畜苑の作品、イベントどれも良いものを作ることができました。これは七十代目畜友会のキャラの濃い、我が強い、癖の塊のメンバーがいたからこそだと思います。私がこのメンバーでよかったと思えたことは、良い結果を残すことができたからではなくシーズン中、心から楽しいと思うことができたからです。一つの事に全員で、全力で取り組んでいるとき、「あーやべぇ、気持ちいい。」と思えました。しかし、七十代目畜友会は個性が強すぎるが故にたくさんぶつかり合いました。辛いこともたくさんありました。そんな時私はある先輩から乗り越える方法を教わっていました。それは歯を食いしばることです。きついとき、辛いときは歯を食いしばることで乗り越えられました。そんなことをしていると自然とキマッているねといわれるようになりました。終わって考えると確かにキマッていました。口を開けば「気持ちい、高まる、キマる、飛ぶ」などといっていたかもしれません。これができたからこそ毎日楽しく過ごせたのは間違いありません。後輩たちにもこの秘技を伝授していきたいと思います。

最後に、七十代目畜友会の皆、動物科学科の後輩、仲間に入れて楽しませ、ガンギマリお兄さんと呼んでくれてくれてありがとうございました。畜友会が一番キマッていました。今年から動物科学科統一本部になりますが、みんなで歯を食いしばりながら頑張ってください。

様々な面でサポート、応援してくださった先生方、先輩方、生徒の皆様ありがとうございました。この場をお借りして御礼申し上げます。これからも動物科学科統一本部のサポート、応援よろしくお願いします。

第20回収穫祭について

家畜苑部門　樋山　颯

私の収穫祭の主な活動は、畜産学科統一本部、家畜苑部門に所属し、収穫祭を盛り上げたことです。また、愛豚會、鶏凰廻では声出しをするなどの活動をしました。

家畜苑の収穫祭準備の具体的な作業について。

家畜苑の準備作業は実質最も作業量が多いです。

ベンチ作り、顔パネル作り、踏み台や牛の置物、豚の置物などの制作、鳥小屋作り、単管の後ろの絵の作成、入口の門作り、単管を組む作業、等があります。単管に関しては今年は設計図ノートが無かったため、設計図を作るところから始めました。

単管に貼る絵に関しては、メインの動物を前に置くことを考慮に入れた上でできるだけシンプルな色使いをするよう工夫しました。

門の制作では、木を組むという難しいことに挑戦しました。木組をすることでより安定し、木組を見せることでより完成度が高い物が出来たと思います。

家畜苑は収穫祭において、一番来客が多い場所だと思います。そのため、小さい子供が触っても展示物が壊れないように、入口の門や鶏小屋、単管の設置、設計をしました。私たちの部門の目的としては、多くの人に実際に家畜に触れてもらうことで動物への興味や関心を持ってもらうことです。これは畜産学科の一人としても、とてもやり甲斐のある活動でした。目的を達成するために、去年より事細かに当日のシフトを組むことで、「牛のブラッシング」や「ヒヨコのふれあい体験」、「バター作り体験」の回数を増やし、多くの人に体験してもらうことが出来ました。また、動物達に去年以上の負荷がかからないように動物達の休憩の時間も考慮しました。

私達家畜苑は一人一人自主的に家畜の勉強や家畜の名前を覚えることで、当日に質問されても答えられる様な対策もとりました。

今回の収穫祭では作業の効率性や臨機応変さを学びました。また、その他の体育祭や農大ナイトカーニバルなど畜産学科統一本部全体の活動においても、協調性を学ぶと共に、大学生活における一番の思い出作りができたと思います。

畜産学科統一本部について

特別企画部門委員長
松宮　桃香

私は1年生の時の新歓で畜産学科統一本部という存在を知りました。

入ろうと思った理由は収穫祭の運営に携わりたいと思ったからです。

夏休みに入り、収穫祭の準備だけでなく体育祭に出場しそこで、演舞というものをしなければいけないと知りました。私は踊ることがすごく苦手であり、夏休みを終えると毎日演舞練習がありそれにより逃げ出したくなり、この収穫祭が終わったら、辞めようとまで考えていました。演舞があると思うとストレスで腹痛を起こしたりやる気が起きなくなりました。しかし、この気持ちが変わったのは収穫祭と体育祭が終えた時です。

収穫祭では、来場者の方が笑顔になって帰っていく様子ややり切ったという先輩方の顔を見てやはり、こういう風に全力で何かに取り組むことが出来るのはここしかないなと考えるようになりました。体育祭では、演舞が終わったあと先輩方が泣いている姿や自分が踊りきれたという達成感を得ることができました。

二年生になり、私は特別企画部門でステージ企画で自分たちがやりたい企画は何なのか、何なら盛り上がる企画なのかを考え、思った企画が通らず苦しみましたが、先輩や同期、総務部など色々な人の手を借りながら進めることが出来、成功することが出来ました。

また、演舞では去年の成果もあり後輩がいるということが自分にとっては心に大きな変化があり、楽しいと思うようになっていきました。

三年生になり、委員長として後輩を指導しながらやって行かなければ行けない立場になりました。特別企画の後輩は去年参加していない子たちだったのでどう関わっていいか分かりませんでした。仕事面はきちんと教えないといけないと考えました。私はどこまで踏み込んで良いのか分からなくなりましたが、同期に助けられました。相談することで心が穏やかになっていきました。そして一緒に仕事をしていく内に後輩と仲良くなることができました。そうして、一緒に収穫祭を盛り上げることができ、楽しむことが出来ました。収穫祭でこんなに楽しくできたのは同期、後輩、先輩、他学科、総務など様々人と関わったからです。その人たちの支えがなかったらもう私は統一本部を続けられませんでした。関わってくれた人々には感謝しかありません。ありがとうございました。来年は畜産学科ではなく動物科学科としてのステージ企画となります。どういった企画となるのか楽しみです。

愛羅武勇

特別企画部門
橋本　諭

私は畜産学科統一本部としての活動に幕が閉じ、今振り返ってみると様々な経験を出来たことにとても感謝しています。私は、東京農業大学の畜産学科に入学し、すぐに出会った畜友會の先輩に勧められ入ることを決めました。先輩方こんなを誘ってくださりありがとうございました。

さて、3年間の活動を振り返るとたくさんの思い出が溢れ出します。1年生の時、右も左もわからずシーズンが始まるとちょこちょこお手伝いをしにカラーコーンに絵を描いた記憶があります。また、一度だけ見学した演舞を渋った挙句踊ることを決め、手伝いも演舞も面倒になれば皆でパチンコに行きサボっていた事がとても懐かしく思います。どの部門に入りたいかを考える時にも先輩が特別企画部門に誘ってくれた事で特企に入りたいと思うようになり、シーズン後半には畜友會の活動にかなり参加していくようになりました。そして、2年生になると本格的に部門に分かれ特企としての活動がスタートしました。最初は、何をいつからどのように始めれば全く分からず苦悩の日々だったことを思い出します。そんな時でも畜友會に誘ってくれた先輩にたくさん助けてもらい、徐々に活動もスムーズに進みました。その中でも前夜祭のNCNは、毎年特企が考え、毎年脱いで面白いことをやり盛り上げて優勝していて、洋介さんと二人でやっと特企の活動をできとても楽しかったなという思いが今でも忘れられません。あた、自分たちの企画では、最初は全くやる気ではなかった自分と真面目な桃ちゃんと沢山もめましたが、本番は何とか成功出来、色々あったけど今となってはいい思い出です。そんなこんなで私は2年生まで大好きな先輩の背中を負い続け、畜友會の活動を頑張っていました。そんな先輩達が引退し、3年生になった私は、部門の後輩ができ2年生から入る後輩が多く、畜友會をどんなことしているかあまり知らない後輩を引っ張っていけるのか不安ばかりでした。でも、素直で活動も真面目に取り組む後輩を見て私自身が引っ張ってもらったように思います。そんな中、活動をしていく中で私達の企画は昨年同様で歯車が合わずうまくかみ合わなかったですが、お互いが折れつつ軌道修正をして当日も企画時間ぴったりに終わらせることができ、企画大成功で終われて本当によかったなと思い俺のわがままに最後まで付き合ってくれた美女達、野獣達、本当に本当にありがとう。優勝も出来て、最高でした。

私が3年間畜友會を辞めずに続けられたのは70代目畜産学科統一本部統一委員長である中牟田泰央君のおかげであります。泰央、お前とは真逆の性格で我が強い俺らは2年生の時、シーズンになると毎日のように喧嘩してたな。でも、俺らがトップの3年になった時、お前の存在のでかさに気付かされました。泰央が統一委員長で本当に良かったです。泰央がいたからこそ物凄く成長ができた畜友會活動でした。感謝しています。ありがとうございました。最高の統一委員長です。

そして、私の1番支えになってくれた畜産学科の社長こと木原龍成。感謝してもしきれません。嫌な時は作業サボって遊びに行ったり、毎日の様に私の愚痴を聞いてくれたりアドバイスをくれたり、時には陰の力持ちみたいに自分の言いたい意見を押し殺し、みんなの意見に合わせ上手く畜友會を回していてくれたり、たまにブチ切れてトンカチぶん回したり、家畜園の園長としての責任で仕事かのように作業したりしていた龍成。尊敬です。本当にありがとう。

長くなってしまいましたが私達は、最後の畜産学科としての活動を全力で突っ走りました。その結果、神輿・NCN優勝。演舞5位櫓2位。体育祭総合2位で幕を閉じることになりました。総

合優勝は逃したものの悔いはありません。3年生、2年生、1年生のみんな、本当にありがとう。最高の思い出です。

そして体育祭など協力して頂いた畜産学科の皆さん、教員の先生方、本当にありがとうございました。

最後になりますが、これからは動物科学科として統一本部は引き継がれています。後輩達には畜産学科のいい所だけ真似し悪い所は良くしていき、もっともっと動物科学科としての色にしていって欲しいなと思います。陰ながら動物科学科統一本部の活動を応援しています。頑張って下さい。

ありがとう畜友會。さよなら畜友會。頑張れ動物科学科。

七〇代目の仲間たち

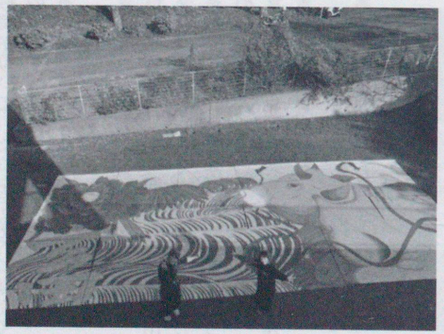
櫓部門委員長　半谷　安紗美

収穫祭と体育祭が終わり、約一年が経ちました。時間が経つのはとても早いですが、わたしには畜産学科統一本部として活動した日々の記憶が昨日のことのように蘇ってきます。

昨年度は最後の畜産学科ということや、自分が体育祭の順位に関わる櫓部門であること、そして、その櫓部門の委員長を務めるということが重なり、かなりプレッシャーを感じていました。何も分からないままシーズンが始まり、不安に押し潰されそうなときもたくさんありましたが、そんなときに元気をくれたのは三年生のみんなでした。

わたし達の代は本当に個性豊かで、キャラが濃くて、クセが強い人達の集まりだと思います。そのおかげか、いつも笑いが絶えず、くだらないことや面白いことばかりしていた気がします。深夜に突如始まる肩パン大会とか、いきなり髪の毛全部剃り始める人がいたりとか、今考えたら頭がおかしすぎて大丈夫かなと心配するレベルの内容です。でも、そんなくだらないけど面白いことがたくさんあったからこそ、きつい作業や終夜をこなすことができました。みんな個性豊かすぎてバトルが多かったのも今となっては良い思い出です（笑）

そんな日々をもう送ることができないのはとても寂しいですが、一緒に作業をし、支え合った仲間がみんなだったからこそ、畜産学科統一本部に入って本当に良かったと思うことができました。畜友での思い出は絶対に忘れることはないと思います。卒業して社会人になっても、みんなで集まって飲み会とかしようね。みんなと出会えて良かったです、ありがとうございました。



感想

櫓部門
太田　碧

「第二位　畜産学科」私は耳を疑った。自然と涙が溢れた。一年前と同じ言葉であったが、感じるものは全く別だった。実のところ私は結果が全体に発表される六位以内に、私たちの絵は入らないと思っていた。

私は二年生の時に友達に誘われたのがきっかけで畜友会に入った。元からの友達は二、三人で、極度の人見知りの私は軽い気持ちで入ったことを後悔した。しかし人に恵まれ、皆新入りの私にも話しかけてくれた。先輩方もたくさん笑わせてくれた。そして十月後半には私のつまらない後悔は消え、楽しさに変わっていた。結果は二位だったが私はどこの学科よりも一番畜産がかっこいいという自信があった。そして来年こそ一位になってやると息巻いた。

そして今年度。三年生は考えなくてはいけないことがたくさんあった。二年生と比べ授業が少ない分、塗る範囲も多くなった。スロースタートに加え、塗り直しもした。強い台風もきたし板も少し割れた。部門内で揉め事もあった。三年生としての自覚の甘さから、去年はなかったことが沢山起きた。先輩方の偉大さを感じた。絵にも自信が持てず、どうしても去年と比べてしまった。他学科が作業をしている前を通るたびにプレッシャーを感じた。他部門の人が他学科の絵を褒めるたびに耳を塞ぎたくなった。そんな中での私の支えは安紗美だった。辛い時も、安紗美は面白いことを言って場を和ませてくれた。家に泊まらせてもらったり、一緒にラーメンを食べに行って愚痴をこぼしたりもした。同じ部門で同じ時間を共有している安紗美だから話せることも沢山あった。きっと安紗美じゃなかったら、こんなに楽しくなかっただろうし本気で作業もしていなかった。初めて板を全部並べて上から見たときに安紗美が泣いていたのを印象的に覚えている。安紗美もきっと沢山の不安や、委員長としてのプレッシャーがあったのだろうと考えると私も泣きそうになった。

色んな人に支えられて協力してもらった結果の二位。一位じゃなくても嬉しかった。この二ヶ月間のことを思い出し、きっとこんな達成感、充実感はもう味わえないだろうと感じた。畜友会に入らなければきっと話すことも関わることもなかったメンツで、私は大学生活の最高の時間を過ごすことができた。卒業してからも関わっていきたいと本気で思えるこの二十人で作った七十代目畜産学科統一本部での思い出は私にとって宝物だ。

皆、本当にありがとう。お疲れ様でした。

活動

装飾部門委員長
木瀬　康太郎

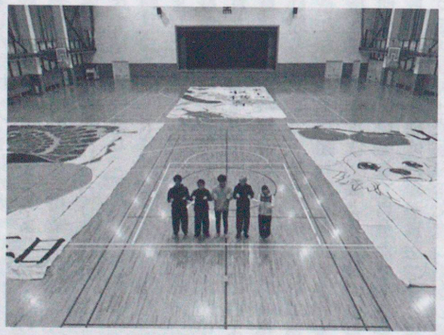
装飾部門では毎年、収穫祭の研究棟アートとして大きな垂れ幕を作り、学内装飾を行なっています。今年度湘北短大側には、三年生がデザインした、農産物が街全体を流通する様子と、農学に関わる様々なものをポップな絵柄で表現した二枚の垂れ幕を、けやき食堂側には二年生がデザインした、制服を着た農大応援団が大根踊りをする様子の垂れ幕を飾らしていただきました。

装飾部門の活動は、六月の布選びから始まり、夏休みの開始と同時にミシンを使っての作業に入ります。まずは大きい布と大きい布を繋ぐための耳づくり。たくさんの布をしっかり繋げるために、何日もかけて数百の耳を作ります。

九月に入ると体育館に布を全て広げて下書きが始まります。A4サイズだった原稿を何十メートルもの布に書き写すのは至難の業でした。九月下旬、長い時間をかけて下準備をしてきた布にペンキで色を塗ります。一枚一枚塗り仕上げていくので、布にロープを通し、耳を結び全ての布を繋ぎ合わせ、研究棟から垂らすまでは、垂れ幕がどう見えるのか分かりませんので心配でした。

十月三十一日、ついに研究棟の屋上から布が下され完成しました。完成した様子を遠くから見て確認した時に感じた、達成感の後の喪失感は今でも忘れられません。

来年度もまた、より素晴らしい作品を完成させますので、収穫祭に足を運ばれた際には、皆さま是非研究棟を色んな角度から見上げてみてください。



「犬猿」

装飾部門　宇都宮　遥　斗

今年度の装飾部門は三年生二人、二年生三人のメンバーで活動を行いました。今年の私の目標としては、去年の畜友の活動にほとんど参加する事が出来なかったため今年は他のメンバーに迷惑をかけないよう行動することと、他部門のとの交流を持ち協力し合うことを目標に頑張りました。装飾部門の目標としては「去年よりも計画的に且つスムーズに活動をする」をテーマに行いました。活動の始まりは六月ぐらいに布の買い出しから始まり、垂れ幕を吊し上げるために必要な耳作り約１６００枚を夏休みが始まる前に終わらせる事を目標に制作をしていました。去年は全然参加できなかったこともあって九月に入っても耳作りを行っている状態でしたが、今年は7月で全ての耳が完成したのが印象に残っています。次に、絵を描く布を制作しました。約４５０ｍもある布を28枚約15ｍで切り取り両端を縫い付ける作業と両端を縫い終わった後に夏休み前に作り上げた耳を0.5ｍ間隔で縫い付けるという装飾部門の一番きつい作業を九月までに終わらせる事を目標に頑張りました。私は十月丸一ヶ月休みをいただくために頑張って終わらそうと焦って作業をして帰省してしまいました。五日後ぐらいに長の木瀬氏から電話が掛かってきて電話越しに怒られたのも記憶にあります。その節はすみませんでした。私が帰省して、今年の絵を考え悩んでいたときに、長の木瀬氏が犬を描くという風に言っていたので「じゃあ俺たちの仲の悪さを表現するために俺は猿を描くわ」と提案しました。猿をどのように描こうかと考えたときに、頭の中で浮かんだのが日光東照宮の三猿でした。下書きに模写して写真で送ったところ、直ぐに却下されて木瀬氏が描いた猿が送られてきました。「じゃあそれでいいよ」と私が言うと彼は「わかった」と答えました。数週間して厚木キャンパスに帰って作業をしていくうちに私は違和感を感じました。一枚目の絵が完成していて、心の中で「はや、一枚目できたがや」と思いながらその布を開いてみるとあら不思議、木瀬氏の所属している研究室の動物と私が所属している研究室の動物が書かれていて自分が提案した猿は一つも描かれていませんでした。驚愕で言葉も見つからないまま時は過ぎ去りました。この瞬間にやっぱり「犬猿の仲やな」と思いました。作業を淡々とこなしていると十月には研究室に垂れ幕を掛けるだけの状態までになりました。これは、木瀬氏をはじめ優秀な二年生のおかげで装飾部門の目標であった計画的且つスムーズに活動することが達成出来たのではないかと思いました。装飾部門としては、他部門の手伝いにほとんど参加する事が出来なかったのに対して他部門の方は装飾の手伝いに来てくれたこと、本当に助かりました。心より御礼申し上げます。私の目標であった他のメンバーに迷惑を掛けないと言うことは木瀬氏に怒られたこともあり達成したとは言えないけど誰よりも装飾のことを考えて行動したと思います。もう一つの他部門との交流を持ち協力し合うは、誰よりも装飾のことを考えて行動した結果、他部門の手伝いをして自分たちが人手の欲しいときに協力してもらえるように動けたのが良かったと思いました。また、悩みを持っている人と積極的に交流して少しでも楽に楽しく活動ができる環境を作れたのは良かったが、一年生と交流を図れなかったのが後悔しています。日本一いや世界一、器の小さい人間と活動をしていると些細な事で揉める場面も多かったのですが、それを乗り越えたからこそ素晴らしい作品ができたのでは無いかと感じました。長の木瀬氏お疲れさん。畜友の活動を通して学んだことは、時間に余裕を持って行動すること、協調性を持ち行動することを学びました。時間は、社会に出たときにルーズな人は何をやっても後手後手になり他力本願で、全てのことを解決するようになるなと思ったことと、自分のスケジュールを組めない人に人は付いていかないし、第三者から見て切羽詰まっている人に見えるため時間に余裕を持つことは大切なことだと思いました。協調性は、自分たちだけでは作品も完成していないと思うし、仲間がいるからこそやる気も継続する気力も湧くと思う。相手に合わせるのではなく、自分の意見を言い合って時には相手の事を受け入れる寛大な心を持つ大人になれば漢に磨きがかかるのかなと統一本部を経験して思いました。

宣伝隊

宣伝隊部門委員長　松澤　琉貴

畜産学科統一本部に入っての一番の思い出は、宣伝隊での日々です。最初の部門希望では、宣伝隊は第二志望でした。自分の学科の先輩も他学科の同輩、先輩も全く知らない状態で入った宣伝隊でしたが、すぐ打ち解け本当に楽しく素敵な先輩方に恵まれたなと思いました。ゆうみさんはいつも優しく自分達に対してとても甘くて、仏のような方でした。りょうたろうさんは、いつもよく分からない事をやっていて、仲良くなれるのかなと思っていましたが今ではとても仲良くしてもらっていて感謝しかないです。

そして自分が三年生になり後輩達が入ってきました。先輩方がいなくなる寂しさと、上級生としての重荷だったり不安を感じていました。ですが、後輩達みんないい子で人懐っこく、ゆきこ、らいき、きざす、この三人が宣伝隊に入ってきてくれて本当に良かったです。先輩がいない寂しさよりもかわいい後輩達が入ってきたという事の方が大きくなり、三年生の年も宣伝

隊での活動が楽しくなりました。
本当にあっという間に時間は過ぎて、今でも自分が二年生の時に行った顔合わせの事をついこの間の様に感じます。それ程までに宣伝隊での活動は楽しいものでした。もちろん辛い事や厳しい事もありました。ですが、それより楽しさの方が勝ちとても思い出に残る日々でした。
本当に宣伝隊でよかったです。

第20回収穫祭

宣伝隊本部副隊長
筑紫　大貴

今思い返してみるとこの1年間はありきたりな言葉かもしれないが終わってみると凄く長いようで短い一年間だった。
宣伝隊本部としての活動は第19回収穫祭が終わった途端始まった。年始には予算案を決めていなくてはならないからだ。私は今まで行ってきたことを変えていきたいと意気込んでいたが、現実と照らし合わせてみるとそう上手くはいかなかった。今思うとあの時が一番どうすればいいか悩んでいたかもしれない。
全体としての活動が始まったのは5月からだった。2週間に一回集まって話し合いをしたり8月にある鮎祭りで披露する大根踊りを練習した。厚木のイベントに参加して宣伝活動をしたりとなんやかんやあり本格的に活動が始まったのは9月からだ。
今年度の活動は何もかもが例年以上に早く終わった、その要因の一つとして仲間に恵まれたという点がある。仕事量としては今まで以上にも関わらず周りの仲間たちがついてきてくれて本当に助かった。同学年は3年生になり研究室や個人の用事などがあるにも関わらずプライベートの時間を割いて活動に参加してくれ、一個下の後輩は初めてのシーズンを過ごすのに戸惑いやプライベートを充実させたいという気持ちがあったかもしれないが収穫祭の活動を第一優先に考えてくれて本当に感謝の一言に尽きる。
私の心の中で一番忘れられないのが厚木パレードだ。今年は今まで以上に盛り上げたいというのと絶対に外部からのクレームを入れられないようにするということを目標に掲げていた。宣伝隊は4学科から成り立つ部門なのでシーズンが始まると全員が集まるのは平日22時以降しかない。全員で集まって厚木パレードの段取りの確認を行うときにはみんなへとへとの状態だった。そんな状態で迎えた本番当日は何事もトラブルも起きずに無事成功を収めることができた。何故私がこの出来事が忘れられないかというと全てのプログラムを終了した後、宣伝隊以外の統一のみんなから「いいぞ宣伝隊」の掛け声があったからだ、あの時は突然のことと過ぎて戸惑いがあったが自然と目頭が熱くなった。
今年のシーズンは苦しさより楽しさが勝った、それは間違いなく最高な同期と後輩に恵まれたからと断言できる。そして来年度私の自慢の後輩たちがどんな収穫祭を作り上げていくのかを大好きな宣伝隊と畜友會の同期達と陰ながら見届けたい。

三学科最後の収穫祭

宣伝隊部門
根本　茂塁

今年度の宣伝隊部門は三学科最後の収穫祭のため今までで一番いい収穫祭にすることと「全員悔いのないシーズン」「効率的な作業」を意識して活動していました。宣伝隊の活動は八月から始まり夏の様々なイベントに参加し収穫の宣伝を行っていき、夏休みの中、地道なビラ作りや各駅宣伝を行うための借用取りや野菜配布に使う野菜を伊勢原農場に播種をしに行ったりとほかの部門より早めにスタートをし、収穫祭当日に向け地道な作業を行うことが多い部門です。そんな中効率的にと考えると堅苦しくあまり楽しそうなイメージではないですが夏休み中の作業などでは去年よりかは集まる日数を少なくしたのにもかかわらず、なるべく全員が集まるようにして1日の活動時間を少し長くすることによって去年の活動日数より半分くらいの日数で作業を終わらせることができました。さらに作業中も全員で会話を行い楽しく作業を行うことができたためより仲も深まり、余った休みの期間を使いより仲を深めるため日帰りの旅行などを行うことができました。
宣伝隊は唯一他学科と常に行動をする部門であり、2年生からしたら違う学科の知らない人たちと収穫祭を成功させるために作業を行っていくことになるため学科間の仲の良さはとても大切になってきます。今年度の宣伝隊は今までで1番仲が良かった代になったのではないかと思うくらいシーズンはじめから打ち解けていき仲良くなることができました。そして今年は三学科での最後の収穫祭、体育祭だったため他学科の統一間でもみんな、今まで一番いい収穫祭にするためという同じ目標を持ち、神輿の投票

や体育祭では敵同士の関係になってしまうのにみんなで高め合い厚木一・二・三フィニッシュを達成し、最後には三学科全員で集合写真をとったりもしました。なので、来年度の収穫祭も宣伝隊も今の仲のいい2年生たちがしっかりと引っ張っていき今年度よりもいい収穫祭を行ってくれると思います。

宣伝隊全員の仲も良く一日一日が濃い楽しいシーズンが送れ、体育祭の結果や収穫祭当日の雰囲気も含め今年度の収穫祭は今までで一番いい収穫祭にできたのではないかと思います。なので、三年生は皆悔いがないシーズンが送れたと思います。来年度は新しい学科での初めての収穫祭なので悔いを残さないよう楽しんで最高のスタートを切ってほしいなと思います。

編集後記

五七号目となるふじみのは、本誌にて最終号を迎えました。そして、ふじみの発刊を最後に畜友會も長い歴史に幕を下ろします。今まで多くの畜友會員の熱い思いが刻まれた『ふじみの』の最終号発刊に携われたこと、そしてこうして皆様の手に届き、ご覧いただけていること大変うれしく思います。

今年度は新型コロナウイルスの影響で誰にも予想できない、大変な一年となりました。大学もオンライン授業となり、収穫祭や体育祭も中止。そして卒業式も式典ができず、先の見えない不安や恐怖と戦いながらの大学生活はどこか寂しく、物足りないものだったと思います。しかし畜産学科でのこの四年間は一日一日を振り返ってみると、とても濃く充実した時間だったのではないでしょうか。このふじみのがそんな皆様の四年間を思い出すきっかけになれば幸いです

そして、四月からは四学年が動物科学科となります。今年度収穫祭や体育祭が経験できなかった動物科学科の皆様は、例年の盛り上がりを取り戻すことができるか収穫祭実行委員を中心に、不安を感じていることと思います。そんな動物科学科に私たち畜産学科のできることは限られていますが、ぜひ収穫祭の時期には厚木に足を運び一緒に盛り上げてほしく思います。

最後になりましたが、本誌を発刊するにあたり、お忙しい中ご寄稿くださった先生方、学生の皆さん、ならびに会員の方々に深く御礼申し上げます。

編集委員長　4年　大畑　夏帆

令和3年3月21日　発行

“ふじみの”最終号

ふじみの執行委員　大畑　夏帆

発行者　神奈川県厚木市船子1737
東京農業大学農学部畜産学科畜友会
電話 046(270)6220(総務課)

印刷所　東京都荒川区西尾久7-12-16
創文印刷工業株式会社
電話03(3893)0111

TOKYO NOUGYO DAIGAKU CHIKUSAN-GAKKA